松江市文化財調査報告書　第151集

茶臼山団地開発に伴う発掘調査報告書

山代沖田遺跡

平成24(2012)年11月

松江市教育委員会
財団法人松江市教育文化振興事業団

松江市文化財調査報告書　第151集

茶臼山団地開発に伴う発掘調査報告書

山代沖田遺跡

平成24(2012)年11月

松江市教育委員会
財団法人松江市教育文化振興事業団

例　　言

1．本書は、平成24年度に財団法人松江市教育文化振興事業団が実施した茶臼山団地開発に伴う山代沖田遺跡発掘調査報告書である。

2．本書で報告する発掘調査は有限会社宅建興産から松江市教育委員会が依頼を受け、財団法人松江市教育文化振興事業団が実施した。

3．本調査を実施した遺跡の名称及び所在地は、以下の通りである。

名　　称　　山代沖田遺跡（やましろおきたいせき）

所 在 地　　松江市山代町363－１、364、364－続１、365、367－１

4．現地調査期間

１区・２区調査　　平成24年４月６日～４月20日

３区調査（追加調査）　　平成24年８月６日～９月14日

5．開発面積及び調査面積

開発面積　　1,887㎡

調査面積　　712.8㎡（１区・２区　360.8㎡、３区　352㎡）

6．調査組織

依 頼 者	有限会社　宅建興産		代表取締役	振角　雅博
主 体 者	松江市教育委員会			
事 務 局	松江市教育委員会		教　育　長	福島　律子
	〃	文化財課	課　　長	錦織　慶樹
	〃	〃　調査係	係　　長	赤澤　秀則
	〃	〃　〃	専門企画員	曽田　　健
	〃	〃　〃	副 主 任	川西　　学
調査指導	島根県教育庁	文化財課	企 画 幹	今岡　一三
	島根大学	法文学部	教　　授	大橋　泰夫
実 施 者	財団法人松江市教育文化振興事業団		理 事 長	松浦　正敬
	〃	埋蔵文化財課	課　　長	藤原　　博
	〃	〃　調査係	係　　長	古藤　博昭
	〃	〃　〃	専門企画員	後藤　哲男
	〃	〃　〃	調 査 員	江川　幸子（１・２区担当者）
	〃	〃　〃	調 査 員	廣濱　貴子（３区担当者）
	〃	〃　〃	調査補助員	宇津　直樹（１・２区）
	〃	〃　〃	調査補助員	原　　英誉（３区）

7．調査に携わった発掘作業員

今村郁子、今村ひろ子、今村正人、角田ミヤ子、秦岡富士子、細田信子、細田勇治、吉岡永子、吉岡啓三郎、岩成博美、加藤恵治、勝田和夫、斉藤幸夫、水野正人、水野千久子

8．本書に記載した遺物の実測・復元・浄書、遺構図版作成は以下のものが行った。

小原明美、金坂昇、坂本玲子、須藤佳奈子、原英誉、廣濱貴子

9．本書に掲載した現場写真、遺物写真は廣濱貴子が撮影した。

10. 本書の執筆・編集は松江市教育委員会文化財課の協力を得て、廣濱貴子が行った。

11. 本書における土器の年代観は以下を参照した。

（須恵器）　　島根県古代文化センター『出雲国の形成と国府成立の研究』2010年

（土師器・中世）　日本中世土器研究会『中近世土器の基礎研究Ⅷ』1998年

12. 本書における方位は公共座標北を示し、座標値は世界測地系に準拠した公共座標第Ⅲ系の値である。また、レベル値は海抜標高を示す。

13. 各調査区のグリッドの区画名は、開発範囲の西側端を５m毎に区切り、その南北方向のラインに対して南北、東西両方向に５m毎のグリッドを設定した任意のものであり、公共座標に対応していない。

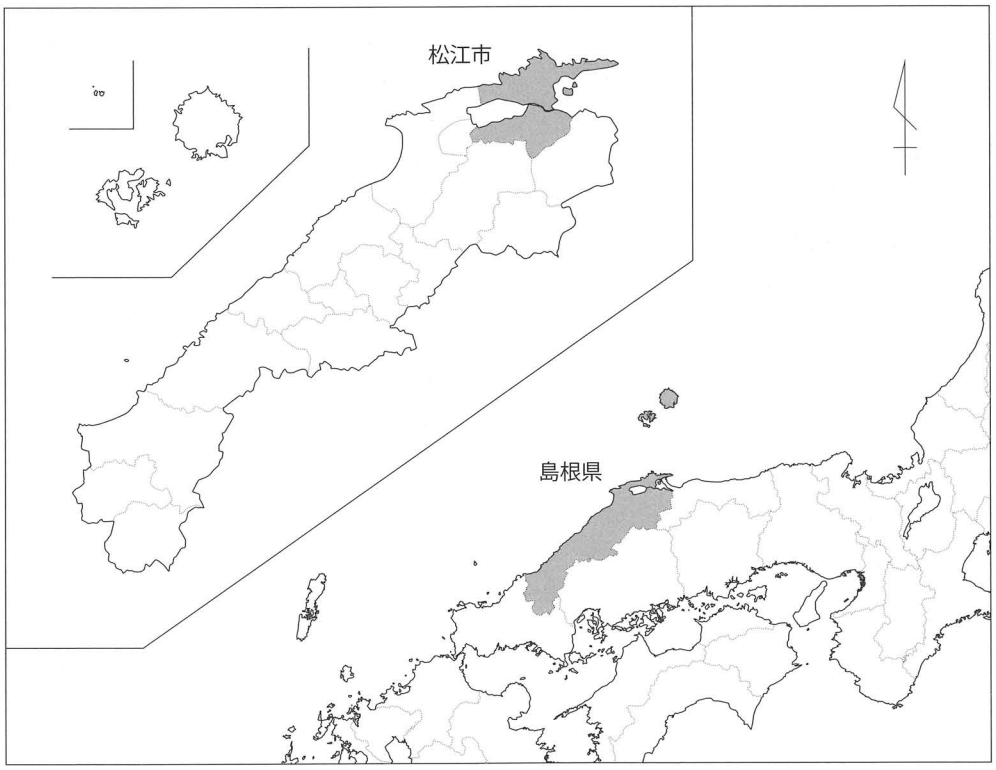
14. 本書の遺構番号は本文の説明上、区ごとに連番で記載した。

15. 本書で使用した遺構番号は以下のとおりである。

SI：竪穴建物　SB：掘立柱建物　SD：溝状遺構　SP：柱穴　SK：土坑

16. 挿図番号は通し番号とし、挿図、図版における遺物番号は遺構ごとに記載した。

17. 出土遺物、実測図及び写真等は松江市教育委員会で保管している。



島根県・松江市位置図

本　文　目　次

第１章　調査に至る経緯 …… 1

第２章　位置と歴史的環境 …… 3

第３章　調査の成果 …… 6

　第１節　調査の経過と概要 …… 6

　第２節　１区の調査 …… 6

　第３節　２区の調査 …… 9

　第４節　３区の調査 …… 9

第４章　まとめ …… 24

表２　遺物観察表 …… 27

写真図版

挿図目次

	島根県・松江市位置図	
第１図	開発予定地と調査範囲図	1
第２図	調査前地形測量図	2
第３図	調査区周辺の字名	3
第４図	山代沖田遺跡と周辺の遺跡分布図	5
第５図	調査区とグリッド配置図	7
第６図	１区　調査成果図	8
第７図	１区　出土遺物	9
第８図	２区　調査成果図	10
第９図	２区　出土遺物	11
第10図	３区　調査成果図	12
第11図	SI01　実測図	13
第12図	SI01　出土遺物	13
第13図	SB01　実測図	14
第14図	SB01　出土遺物	15
第15図	SB02　実測図	16
第16図	SB02　出土遺物	16
第17図	SB03・04　実測図	18
第18図	SB03　出土遺物	19
第19図	SD01・02　実測図	19
第20図	SK01～05　実測図	20
第21図	SK01　出土遺物	21
第22図	SK02　出土遺物	21
第23図	SK05　出土遺物	22
第24図	SD03・04、SK06・07　実測図	22
第25図	SK06　出土遺物	23

表目次

表１	検出した建物の規模と出土遺物	26
表２	遺物観察表	27

写真図版目次

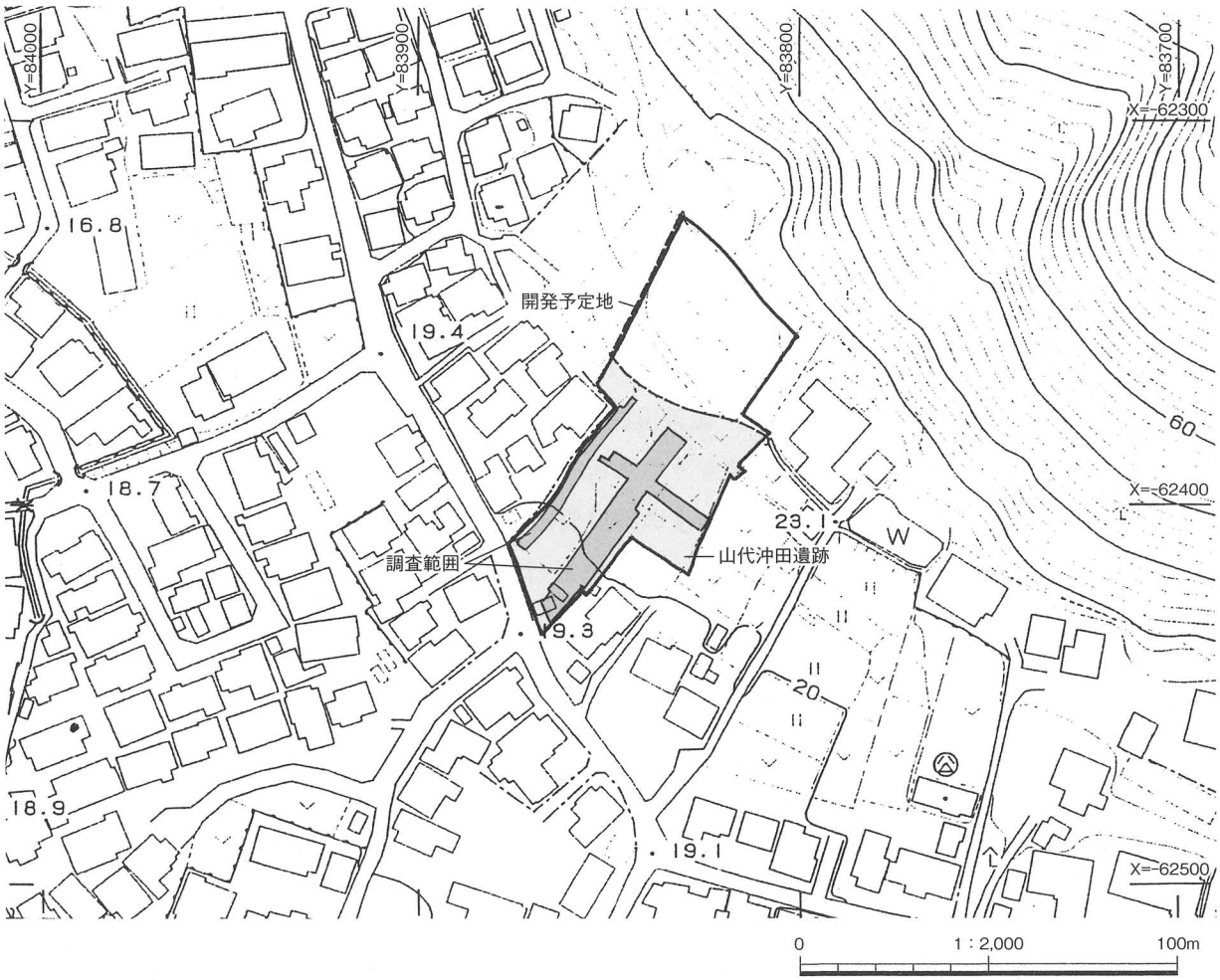
図版１	１区・２区　調査前近景（南西から）
	１区　完掘状況（西から）
	１区　完掘状況（南から）
図版２	２区　完掘状況（南西から）
	２区　完掘状況（一部）（北西から）
	２区　L字状溝（SD01）完掘状況（南西から）
図版３	３区　調査前全景（南西から）
	３区　完掘状況（南西から）
	SI01　完掘状況（南から）
図版４	SB01　完掘状況（西から）
	SB01　SP６　半裁状況（北から）
	SB02　完掘状況（西から）
図版５	SB01・02　完掘状況（北から）
	SB03・04、SK06・07、SD03　完掘状況（南から）
	SD01・02　完掘状況（南東から）
図版６	SK02・03・04・05　完掘状況（南から）
	３区　SK02遺物出土状況
	３区　SK02遺物出土状況
図版７	１区　出土遺物
	２区　出土遺物
	３区　SB01　出土遺物
図版８	３区　SB01　出土遺物
	３区　SI01　出土遺物
	３区　SB02　出土遺物
	３区　SB03　出土遺物
	３区　SK01　出土遺物
	３区　SK03　出土遺物
図版９	３区　SK02　出土遺物
	３区　SK04　出土遺物

第１章　調査に至る経過

平成23年12月12日、有限会社宅建興産から、当該地において宅地造成を行うため、試掘調査依頼書が松江市教育委員会文化財課に提出された。この依頼を受けて文化財課では12月20日に６箇所のトレンチ（T－１～T－６）を設定し、12月26・27日に遺跡の有無確認のため試掘調査を実施した。

調査の結果、T－１・T－２からは耕作土直下の層から直径10～40cmの柱穴と思われるピット数点を検出するとともに、土師器・須恵器片も数点出土した。T－３からは石組みの裏込めと思われる石を伴う土坑が検出された。遺物が出土していないため時期については判断できないが、井戸の跡と推測される。また、T－４からは、深さは20cm程度の平面形は不整形の土坑が見つかり、その覆土からは土師器・須恵器の細片が多数出土した。なお、山裾側に設定したT－５、T－６からは遺物・遺構は検出されなかった。この調査結果からT－１～T－４周辺には遺跡が存在することが確認されたため、字名から当該地を山代沖田遺跡とした。

この調査結果を平成24年１月13日に有限会社宅建興産へ回答し、１月23日に土地所有者から遺跡発見の届出が提出された。この間、有限会社宅建興産と協議を重ねたが、当初予定していた６m幅の進入路を４mに縮小することは可能であるが、計画の根本的な変更は困難との結論に達した。また、工事の着手についても急を要することから、２月13日に埋蔵文化財発掘の届出について提出がなされた。この届出に対し、島根県教育委員会から道路新設予定地については工事着手前に本調査を実施するよ



第１図　開発予定地と調査範囲図（S=１：2,000）

う指示が出された。なお、当時は宅地部分の造成計画が決まっていなかったため、宅地部分については工事計画が決まり次第、発掘の届出を提出することで事業者である有限会社宅建興産と確認した。

島根県教育委員会の指示を受けて３月２日に宅建興産から埋蔵文化財の発掘調査についての依頼が提出され、４月２日に発掘調査の委託契約を締結、４月６日に財団法人松江市教育文化振興事業団により現地の発掘調査が開始された。

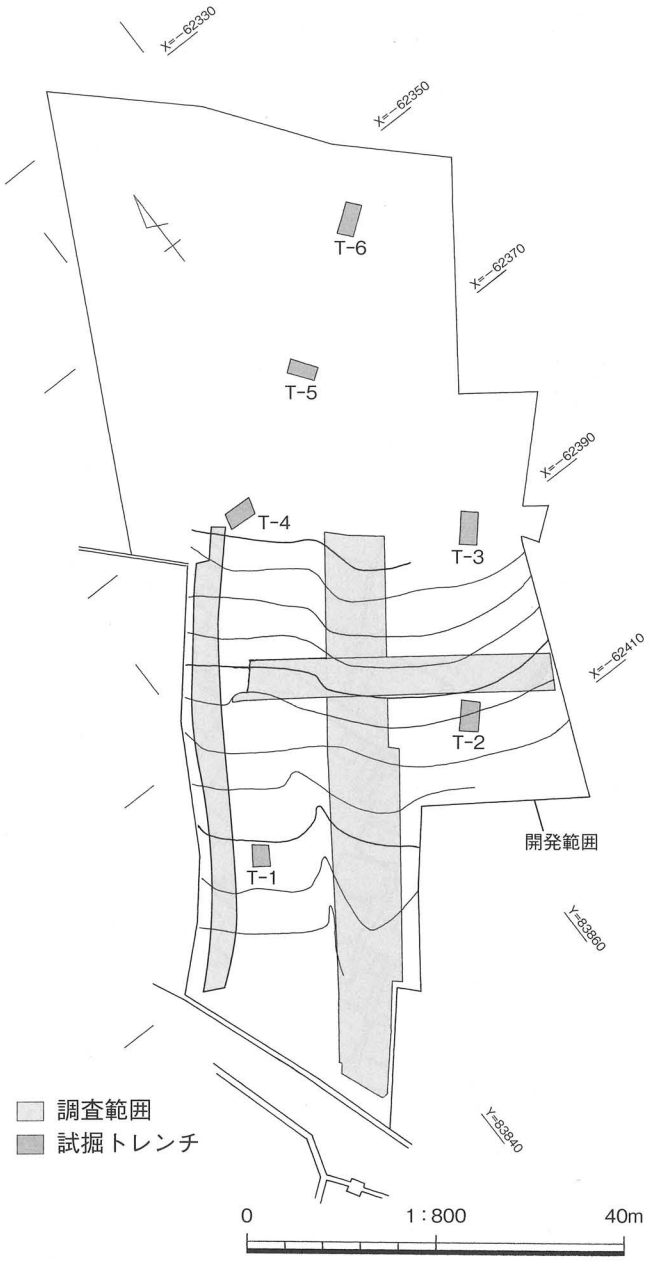
発掘調査は４月20日までの２週間をかけて実施された。

しかし、５月16日に有限会社宅建興産から、造成計画変更の協議があり、道路予定地も変更となった。これを受けて再度７月12日に埋蔵文化財の発掘の届出の提出がなされ、前回と同様、道路新設予定地については工事着手前に本調査を実施するよう島根県教育委員会から指示が出された。この指示を受けて、７月30日に有限会社宅建興産と松江市は変更契約を締結し、８月６日から道路計画変更部分について調査を実施するに至った。

この間も、８月20日に宅建興産から当初は道路幅４ｍの計画であったが、幅６ｍに計画を変更すると旨の協議があり、このため、調査期間中に調査区域を西側へ２ｍ拡張することとなった。

結果的に、発掘調査は９月14日に終了した。

調査の結果から、９月19日に島根県教育委員会と遺跡の取扱い協議を行い、９月20日に「記録保存はやむをえないもの」とする回答を受けた。



第２図　調査前地形測量図（S=１：800）

第２章　位置と歴史的環境

山代沖田遺跡は、島根県松江市南郊、山代町沖田364番外４筆に所在する。

本遺跡周辺は、『出雲国風土記』に「神名樋野」と称されている茶臼山（標高171.5m）の南西麓にあたり、地形は標高20m程の緩傾斜地である。茶臼山の南麓には同じような緩傾斜地が続き、東側には意宇川によって形成された沖積平野が広がり穀倉地帯となっている。

茶臼山周辺は遺跡が多数存在し、古くから人々が生活を営んできたところである。石器時代の黒曜石製細石核が市場遺跡（３）で、玉髄製石核、剥片が下黒田遺跡（８）で発見されている。

縄文時代の遺跡は、意宇平野の北縁部に石斧や後期の磨消縄文土器が出土した才塚遺跡（52）、少し離れた大橋川にそそぐ馬橋川中流域に縄文後・晩期の土器が多く出土した石台遺跡（49）がある。

弥生時代の遺跡は、前期から中期の溝状遺構を中心として土坑や住居跡が検出された布田遺跡（42）、後期の水田跡が発見された上小紋遺跡（50）や向小紋遺跡（51）がある。

古墳時代中後期には大型古墳が築造される。全長94mの前方後方墳の山代二子塚古墳や一辺45m以上の山代方墳（33）、大庭鶏塚（31）、永久宅裏古墳（48）、東淵寺古墳（９）などがある。また、本遺跡から南側の岡田山古墳群の１号墳からは「額田部臣」の銘文が刻まれた円頭大刀が出土している。また、意宇平野周辺部の丘陵斜面には、十王免横穴群（37）、狐谷横穴群（36）、安部谷横穴群（25）など石棺式石室の形態をまねた大規模な横穴群が点在している。

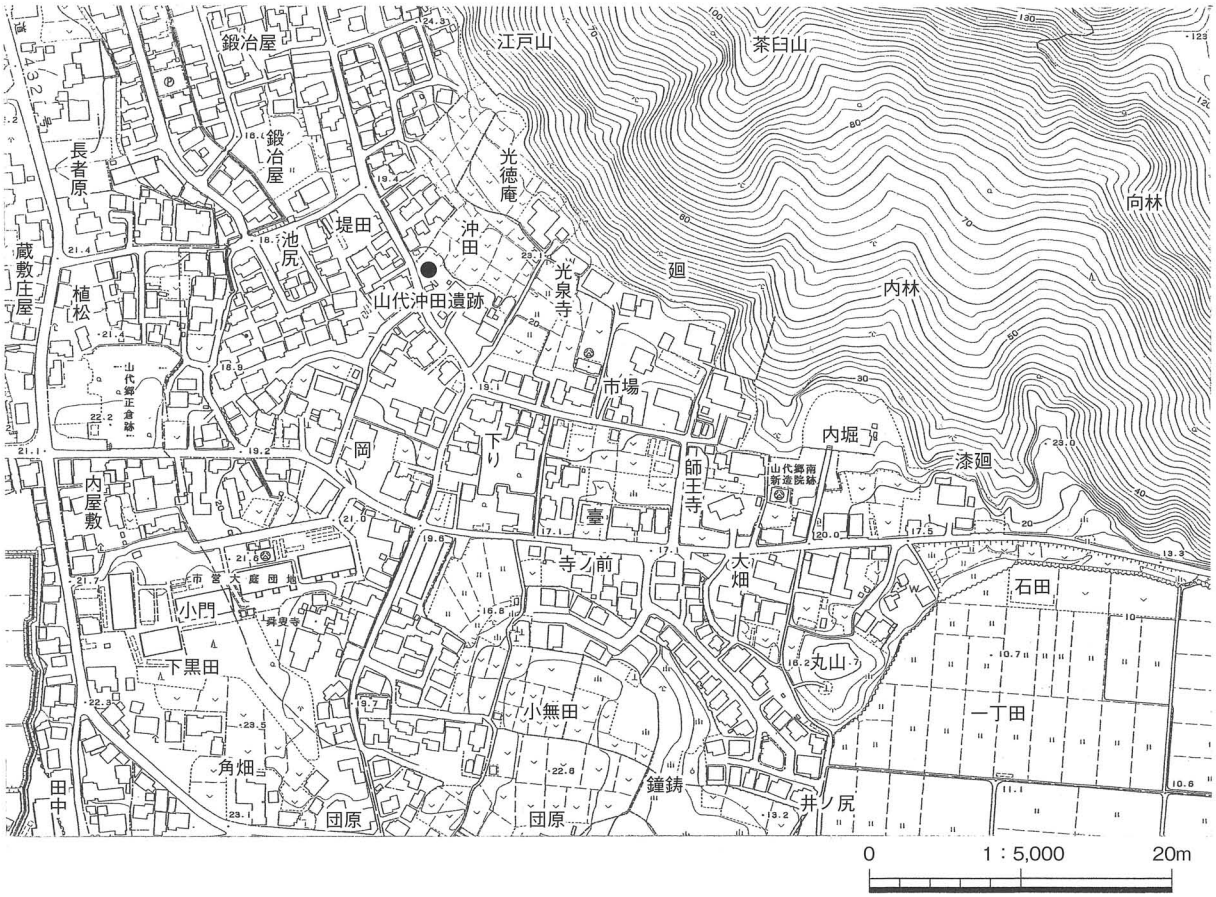
律令時代になると意宇平野とその縁辺には出雲国府跡（22）をはじめ意宇郡家、意宇軍団、駅、山代郷正倉跡（２）など政治上重要な施設が設置され、新造院も山代郷内に２カ所あったことが『出雲国風土記』にみえる。山代南新造院跡は山代郷新造院跡（四王寺跡）（５）に、北新造院跡は来美廃寺跡（35）に比定される説が最も有力である。また、意宇平野の北側には出雲国分寺（40）や国分尼寺（43）が建立され、この一帯は古代出雲の政治と文化の中心地として栄えていたことが窺われる。山代郷南新造院（四王寺）に瓦を供給していた瓦窯が小無田Ⅱ遺跡（53）で３基確認されている。

中世の遺跡としては出雲国造館跡（13）、中竹矢遺跡（44）、長峯遺跡（45）があり、中世以降の遺物が出土している。特に出雲国造館跡からは南宋から輸入された青磁、白磁片が大量に出土している。茶臼山南西麓には14～16世紀の遺跡が多く、山代郷正倉跡（第９調査区）で、南北朝から室町時代のものと考えられる天目茶碗や備前の擂鉢、中国青磁などを伴う時期の建物跡群が検出された。また、山代郷南新造院跡（四王寺跡）からも14～16世紀代のものと思われる中国青磁、石鍋などが出土し、この付近に中世有力者の建物跡の存在を窺わせた。他に黒田館跡（７）、小無田遺跡（６）、下黒田遺跡（８）、市場遺跡からも柱穴や建物跡がみつかっている。本遺跡に近い市場遺跡からは土師器、須恵器の他に瓦質土器や輸入陶磁器が出土し、柱穴や土坑が検出され、柱穴内の出土遺物から近世初頭を含む中世の建物跡と考えられている。市場遺跡の南西側には多数の五輪塔や宝篋印塔が出土した内堀石塔群（４）があり、その近くには観音堂がある。茶臼山城跡（30）は、宍道湖・中海を含め広範囲を見渡せる立地や他の城砦との位置関係から重要な山城であった可能性が高いと考えられている。

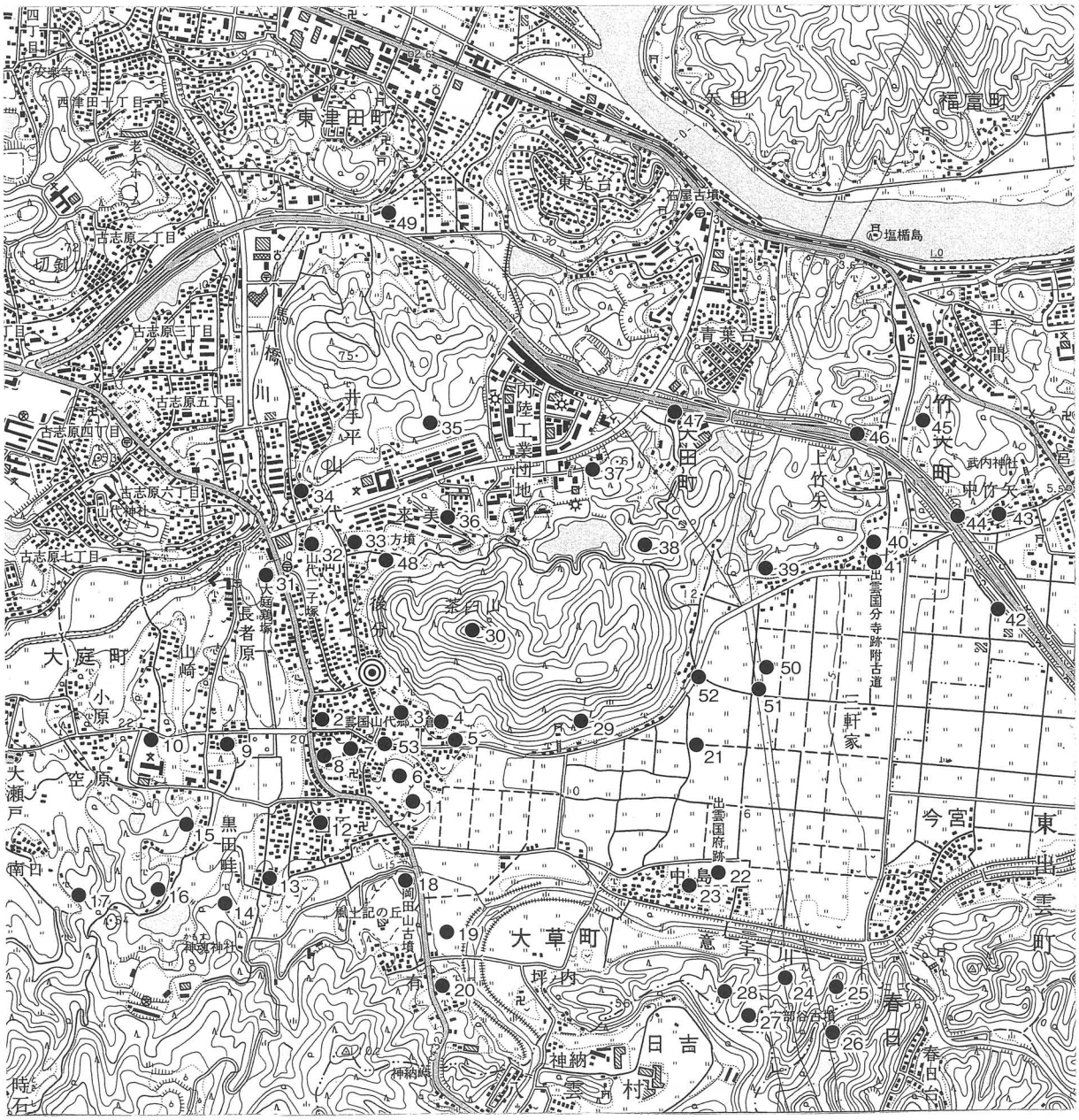
明治年間に作成された地籍図にみられる字名には、茶臼山周辺の地勢や歴史的な様相を示すものがある。第３図をみると、光泉寺、光徳庵、寺ノ前、師王寺など寺院、仏教に関するものや市場、鍛冶場などの生活に関わるもの、内屋敷や小門の屋敷に関係するものなどがみられ、中～近世以降周辺が

どのような領域であったか窺い知ることができる。光泉寺、光徳庵の存在を具体的に知る文献はないが、調査区北側の民家の屋号はまさに光泉寺であり、寺庵が存在していたことを示唆するものである。

【参考文献】
島根県教育委員会『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告Ⅹ』　平成６年
島根県教育委員会『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告Ⅶ』　1990年
島根県教育委員会『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告Ⅲ』　1984年
松江市教育委員会『出雲国造館跡発掘調査報告書』　1993年
松江市建設部建築課　松江市教育委員会『下黒田遺跡発掘調査報告書』　昭和63年
松江市教育委員会　（財）松江市教育文化振興事業団『黒田畦遺跡発掘調査報告書』　1995年
松江市教育委員会　（財）松江市教育文化振興事業団『小無田Ⅱ遺跡発掘調査概報』　1997年



第３図　調査区周辺の字名（S=１：5,000）
（風土記の丘地内遺跡発掘調査報告Ⅲより抜粋）



1 山代沖田遺跡
2 出雲国山代郷正倉跡
3 市場遺跡
4 内堀石塔群
5 山代郷南新造院跡（四王寺跡）
6 小無田遺跡
7 黒田館跡
8 下黒田遺跡
9 東淵寺古墳
10 大庭小学校校庭遺跡
11 団原古墳
12 黒田畦遺跡
13 出雲国造館跡
14 大石古墳群
15 秋上家古墓群
16 大石横穴群
17 荒神谷・後谷古墳群
18 岡田山古墳群
19 岩屋後古墳
20 御崎山古墳
21 樋口玉作跡
22 出雲国府跡
23 大草玉作遺跡
24 古天神古墳
25 安部谷横穴群
26 大草岩船古墳
27 東百塚山古墳群
28 西百塚山古墳群
29 大谷横穴群
30 茶臼山城跡
31 大庭鶏塚
32 山代二子塚
33 山代方墳
34 井出平山古墳群
35 来美廃寺
36 狐谷横穴群
37 十王免横穴群
38 廻田古墳群
39 上竹矢古墳群
40 出雲国分寺
41 出雲国分寺跡　附古道
42 布田遺跡
43 出雲国分尼寺跡
44 中竹矢遺跡
45 長峯遺跡
46 才ノ峠遺跡
47 平所遺跡
48 永久宅裏古墳
49 石台遺跡
50 上向紋遺跡
51 向小紋遺跡
52 才塚遺跡
53 小無田Ⅱ遺跡

第４図　山代沖田遺跡と周辺の遺跡分布図（S=１：25,000）

第３章　調査の成果

第１節　調査の経過と概要（第５図）

山代沖田遺跡は茶臼山南西麓に広がる緩傾斜地に所在する。標高約18～22mに位置し、現況は雑種地であるが以前は畑地であった。

住宅団地開発に伴う発掘調査であり、道路予定地に対して調査を実施した。当初の計画では、開発範囲西端の南北方向とその途中から東側に延びる幅４ｍの範囲が調査区であった。この調査区は現代の水路で分断され自然と２区画に分かれていたので、東西方向に長い調査区を１区、南北方向に長い調査区を２区として調査を行った。しかし、道路部分が開発範囲中央に変更になったため追加調査が必要となり、その追加調査範囲を３区として調査を実施した。尚、１区と重複している部分については、調査を行っていない。

調査の便宜上、１・２区調査の際に、２区の西側、南北方向に５ｍごとに任意で杭を打ち、そのラインに沿ってグリッドを設定した。調査区北西端を基点として、基点から南側にアルファベット、東側に数字を各区画に順に割り当て、その各区画の呼称（例１A区）として調査をおこなった。

試掘調査結果から、表土、耕作土直下が遺構面と考えられ、１～３区とも表土、耕作土を重機によって掘削し、遺構検出をおこなった。その結果、建物、土坑、溝、多数の柱穴を検出した。

第２節　１区の調査（第６図）

１区は南北４ｍ、東西33mの細長い調査区で、標高21m付近に位置する。

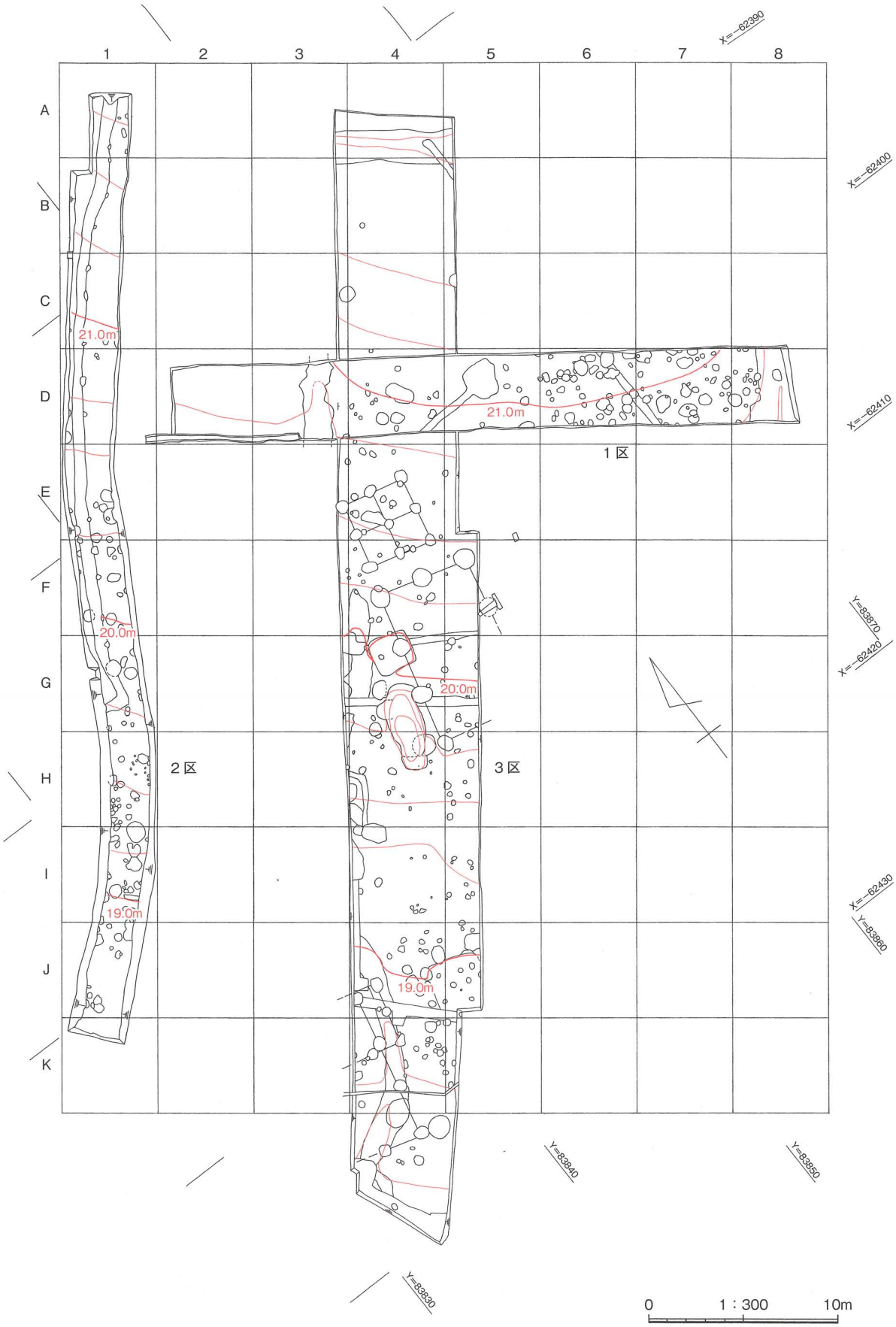
耕作土直下の地山面で遺構平面プランを確認した。遺構は小土坑、柱穴、溝を検出し、東ほど密度が高く、西側ではほとんど遺構は確認されなかった。耕作土直下が遺構面であるため畑の耕作痕や茶の木などの植栽痕、電柱の控え線を固定するために掘られた土坑や農機具部品が混入した土坑が検出された。調査区西側の溝（SD01）は敷地の境界と排水を兼ねた溝に後から茶の木を植栽したもので、土師器や須恵器、陶磁器が出土し、近世以降の溝と考えられる。

調査区中央付近の土坑（SK01）は、南北2.1m、東西1.7m、深さ0.3mを測る。土坑が埋まった後に溝が掘られたもので、土坑内には10～20cm大の角礫が埋まっていた。遺物は出土していない。

調査区東端で南北方向に延びる溝（SD02）を検出した。溝は調査区外へと続いており、現況で南北3.9m、東西1.3～2.3m、深さ0.3～0.5mを測り、底面は南側に向かって傾斜していた。土坑内からは土師器、須恵器の破片が出土している。

遺構の大半は柱穴であり、その約９割については半截をおこなった。柱穴のなかには柱痕を示す土層が確認できるものや根石が存在するものなど、掘立柱建物を構成するような柱穴を多く検出した。柱穴の上縁径0.15～0.7m、深さ0.1～0.5mを測り、土層断面から幅0.1～0.2mの柱痕とみられる黒色土を確認した。柱穴内から多くの土器片が出土したが、いずれも小片で風化しており、図化できるものはなく、唯一、調査区西側の柱穴からほぼ完形の土師器の高台付皿が正位置で出土している。

柱穴から建物の復元を試みたが、確実に同じ建物を構成すると思われる柱穴の並びは確認できなかった。柱穴から出土した遺物のなかには高台付皿の他にも中世の土師器と思われる破片があり、その時期を中心とする遺構群の可能性が高いと考えられる。

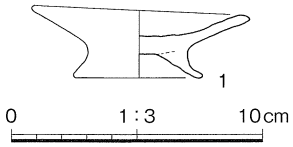


第５図　調査区とグリッド配置図（S=１：300）

第６図　１区　調査成果図（S=１：100）

出土遺物（第７図）

第７図の１は土師器の高台付皿で、口径8.7cm、底径5.1cmを測る。高台は低く、「ハ」の字状にひろがる。内外面とも風化が著しく、外面にわずかにヨコナデがみられ、11～12世紀頃のものと思われる。



第７図　１区　出土遺物
（S=１：３）

第３節　２区の調査（第８図）

２区は開発範囲の西側に位置する南北50m、東西３mの細長い調査区である。

調査区北側では耕作土直下が遺構面であった。斜面下方にあたる調査区南側にいくほど耕作土以下に褐色土や黒色土（第８図12層、16層、18層、19層）が厚く堆積していた。これらの土層からは土師器、須恵器、陶磁器類が出土したが、南端最下層である第19層（黒色土）から現代の瓦片が出土したため、最終遺構面に伴う遺物包含層は存在しないと判断した。

遺構は柱穴や溝、土坑を検出し、南側ほど密度が高かった。調査区北側半分強で、西壁に沿うように柱穴を切る溝（SD01）がL字状に掘られていた。全長33.3m、幅0.5～0.6m、深さ0.3mの溝で、断面の幅、深さや形状が１区で検出した西側の溝（SD01）と近似していたので、ほぼ同時期に掘られたものと考えられる。この溝からは須恵器、土師器、磁器片や瓦が出土し、近世以降の溝と考えられた。

柱穴の規模は上縁径0.15～1.0m、深さ0.1～0.8mを測り、半截をおこなった結果、柱痕を示す土層が確認できる柱穴も多く、柱痕径は0.15m程であった。大部分の柱穴から土師器の甕片や須恵器の坏片、蓋片が出土したが細片が多く、実測できるものは少なかった。調査区の幅が約３mと狭いため、同一建物を構成する柱穴は確認できず、建物の復元はできなかった。

出土遺物（第９図）

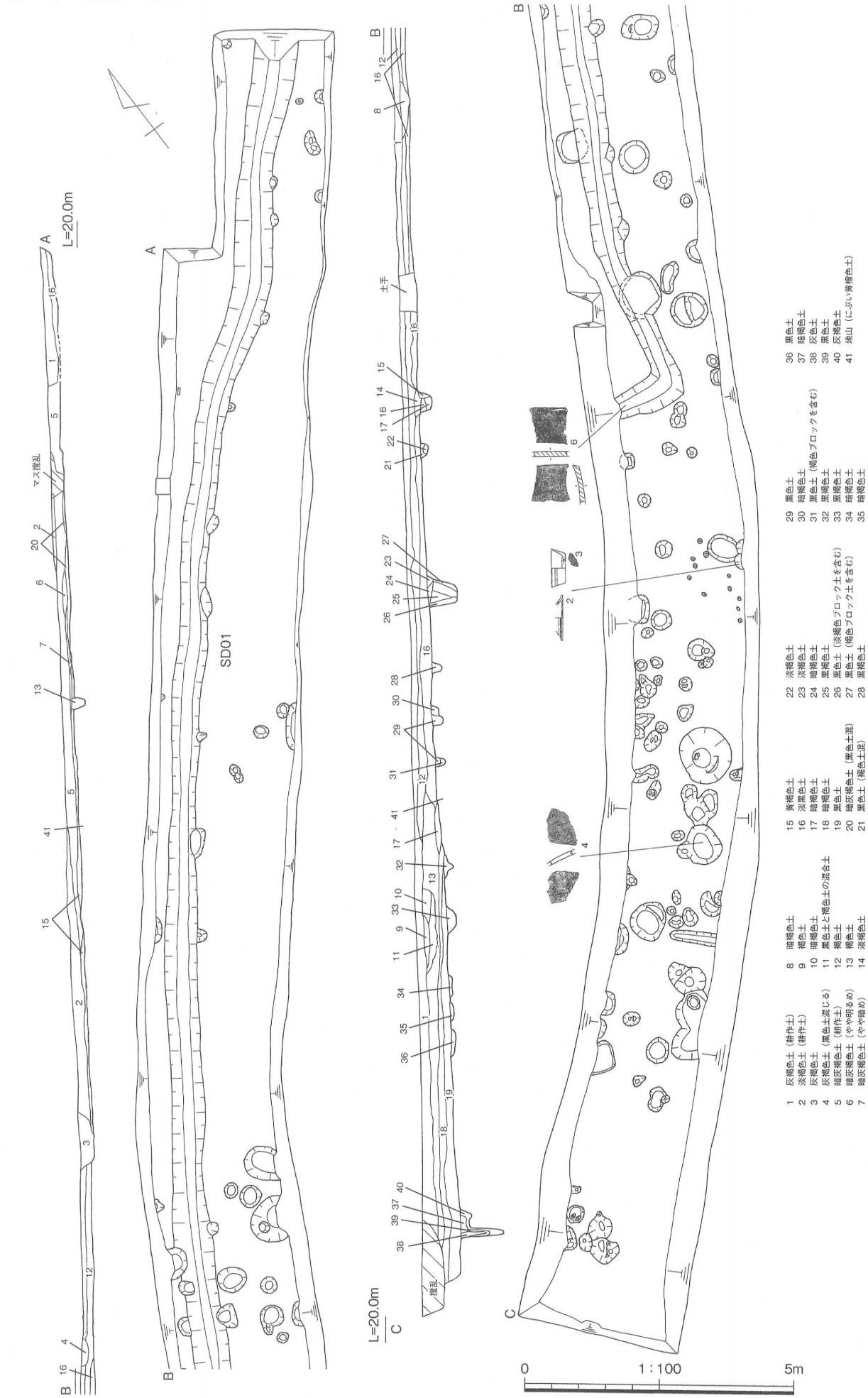
第９図の２～４は須恵器で、調査区南側の柱穴内から出土している。２は蓋で口径13.3cmを測る。口縁端部がわずかに屈曲し、８世紀後半から９世紀前半頃のものと思われる。３は坏である。口径11.4cm、底径8.6cm、器高4.2cmを測り、２と同時期と思われる。４は甕片である。５は堆積土から出土した土師器の甕片である。口縁は緩やかな「く」の字状を呈し、内面にヘラケズリがみられる。６はL字状溝（SD01）から出土した平瓦である。残存長11.6cm、器厚1.5cmを測り、近世以降のものである。

第４節　３区の調査（第10図）

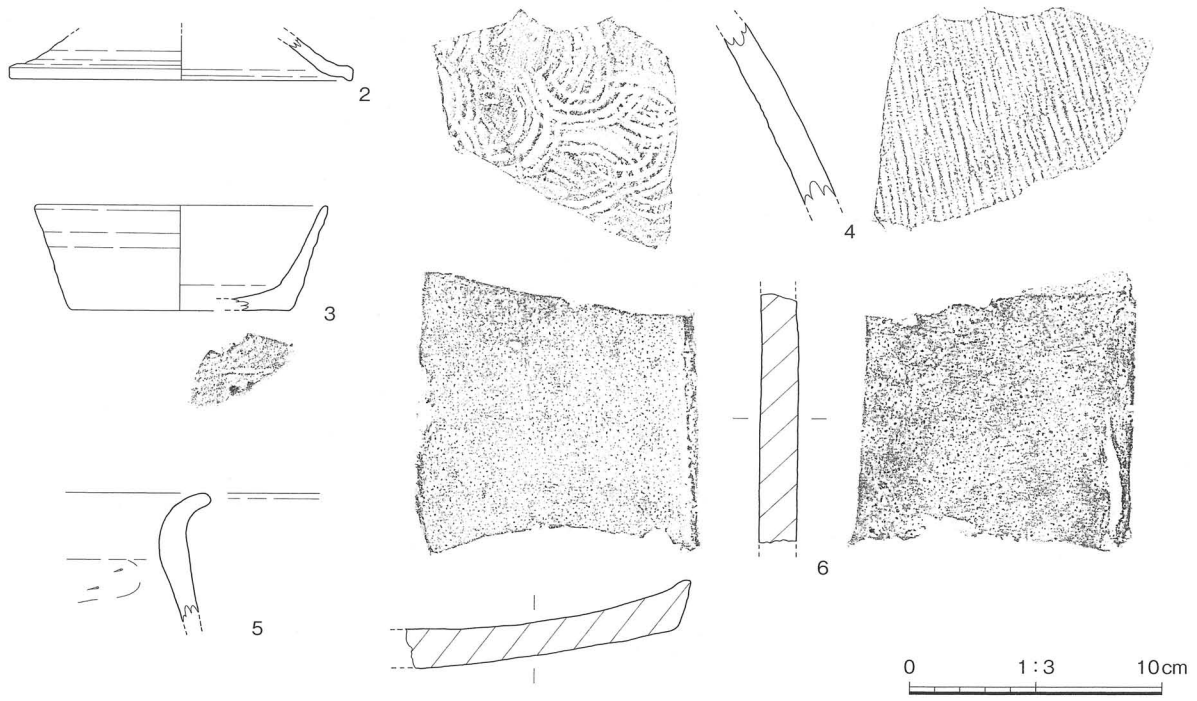
３区は、開発範囲の中央付近に位置する東西６m、南北58.6mの調査区で、一部が１区と重複する。調査途中で４mの道路幅が６mに変更され、調査区域を西側に２m拡張することとなり、一部表土掘削を行っていた東側１m部分については、検出面の実測のみを行い、掘削は行っていない。

調査区内からは、掘立柱建物、竪穴建物、土坑、溝、多数の柱穴を検出した。遺構は全て地山面から検出され、遺構のなかには耕作痕や植栽痕、電柱の控え線を固定するために掘られた土坑もあり、他の区と同様、近現代の土坑が混在していた。

表土、耕作土直下が地山の遺構面であり、一部遺構面上に黒色土（第24層）がみられるところがあった。この黒色土は２区でみられた黒色土（２区　第16、19層）と同層であり、最終遺構面に伴うものではないと思われる。調査区南端では黒褐色粘質土（第５層）や褐灰色粘質土（第６層）が堆積



第８図　２区　調査成果図（S=１：100）



第９図　２区　出土遺物（S=１：３）

し、その上層には近現代以降の盛土がみられた。この粘質土から遺物は出土していないため、時期はわからないが、後述する土坑内から陶器が出土しているため、近世以降の堆積土と思われる。

１．遺構

①竪穴建物SI01（第11図）

調査区南側の東壁側で検出した建物である。検出面標高19.0mを測る。建物の南側はコンクリート塀の攪乱によって、東側は調査区外になるため、遺構全体を調査していない。現状で南北2.4m、東西2.35mを測り、ほぼ方形を呈する。上層から掘られたピットを含め、８個のピットを検出し、SI01に伴うと思われるピット（SP１～４）は直径0.3m前後、深さ５～10cmの浅いものである。床面中央に焼土があり、壁帯も存在することから、竪穴建物が建っていたとは考えられるが、ピットが浅く、どのような建物であったかは不明である。遺物は第６層（黒色土）から土師器の甕片が出土しているのみで、ピット内からは出土していない。

出土遺物（第12図）

第12図の７は土師器の甕片の頸部である。外面は風化し、内面にハケ目がみられる。

時期

出土遺物から古墳時代の建物と考えられる。

②掘立柱建物SB01（第13図）

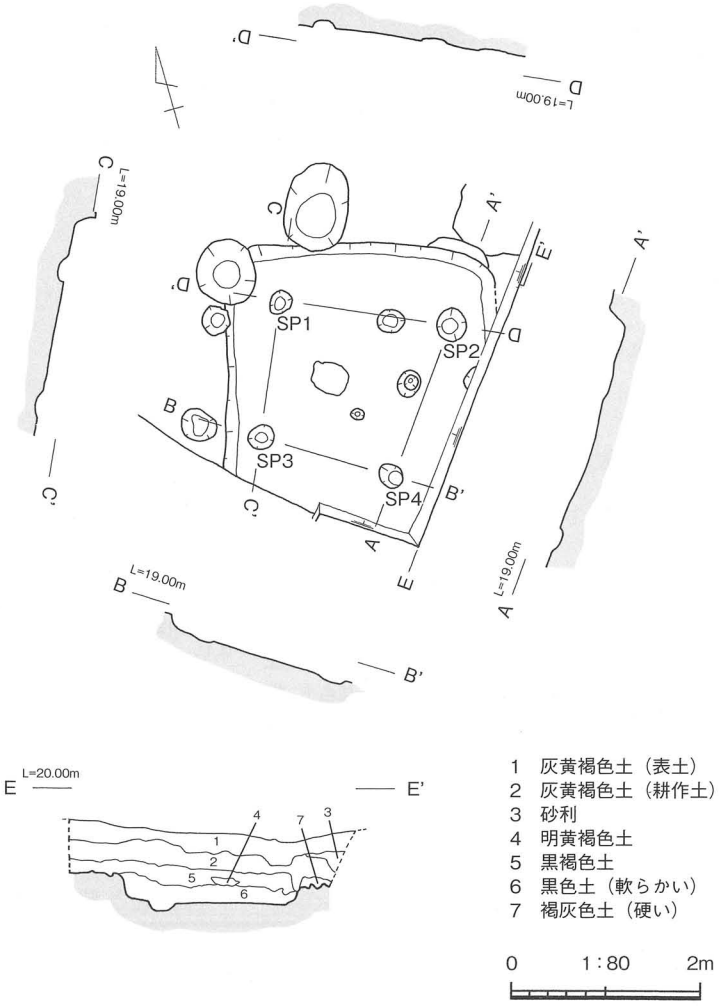
SB01は調査区中央で検出した南北を棟とする建物である。検出状況、土層観察から後述するSK01、SK02より新しい。調査区東側で柱穴確認の為T－１、T－２の掘削を行った。T－１では柱穴は確認できなかったが、T－２において柱穴を確認したことから、SB01は桁行３間（8.4m）、梁間２間（4.7m）の建物と確定した。主軸方位はN－14°－Eを測る。柱間寸法は桁行2.8m、梁間2.3m、2.4mである。

第10図　３区　調査成果図（S=１：150）

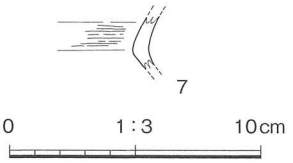
柱掘り方はほぼ円形を呈し、上縁径0.9～1.2m、検出面からの深さ0.5～1.3m、底面標高は19.1～19.3mを測る。柱痕径0.23～0.27mの柱痕跡と考えられる黒色土が底面まで達しているものがあり、柱穴の底面には柱当たりの痕跡がみられた。柱掘り方埋土は明黄褐色土と黒色土がランダムではあるが交互にみられ、版築を意識したようにも思われる。柱掘り方埋土から土師器、須恵器、中世須恵器が、T－２で検出した柱痕土層に落ち込む形で古代瓦が出土している。

出土遺物（第14図）

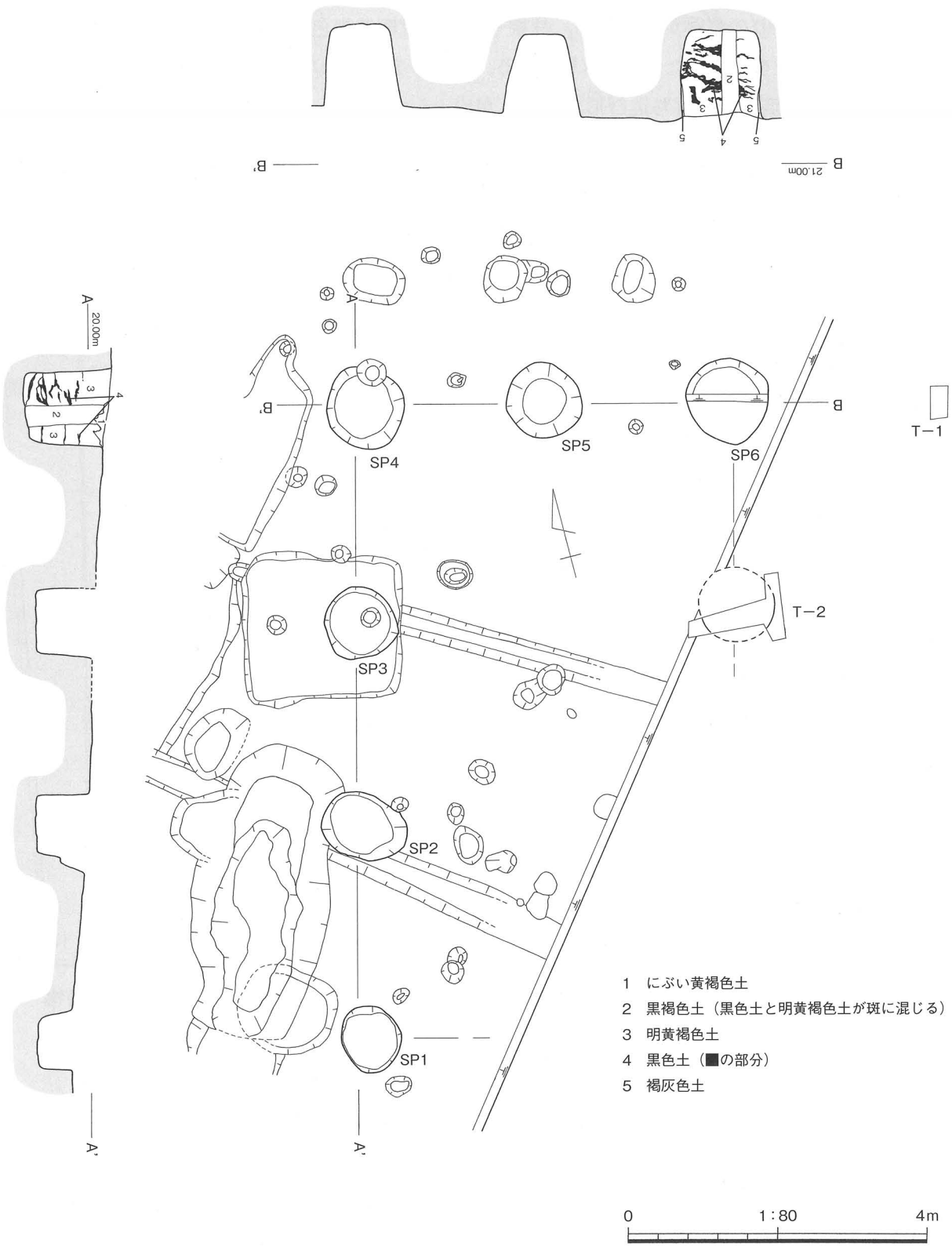
第14図の８～10は須恵器である。８は口径14.8cm、底径9.0cm、器高6.2cmを測る高台付坏である。高台は低く、体部はやや「ハ」の字状に開き、８世紀中葉から９世紀初め頃のものである。９は皿で、口径18.8cm、底径14.4cm、器高3.8cmを測る。８と同時期のものである。10は甕片、11は甑の把手である。12は壺・甕類と思われる中世須恵器の破片である。黄灰色を呈し、軟質で外面に浅い格子目叩き、内面にも格子目の叩きがみられる。内側に格子目の叩きがあるのは珍しく、中世でも古い方と思われる[註1]。13は熨斗瓦である。片面に糸切り痕、もう片面に糸切り後縄目の叩きを施し、焼成後に割るための深さ２mm、幅３mmの分割線がみられる。



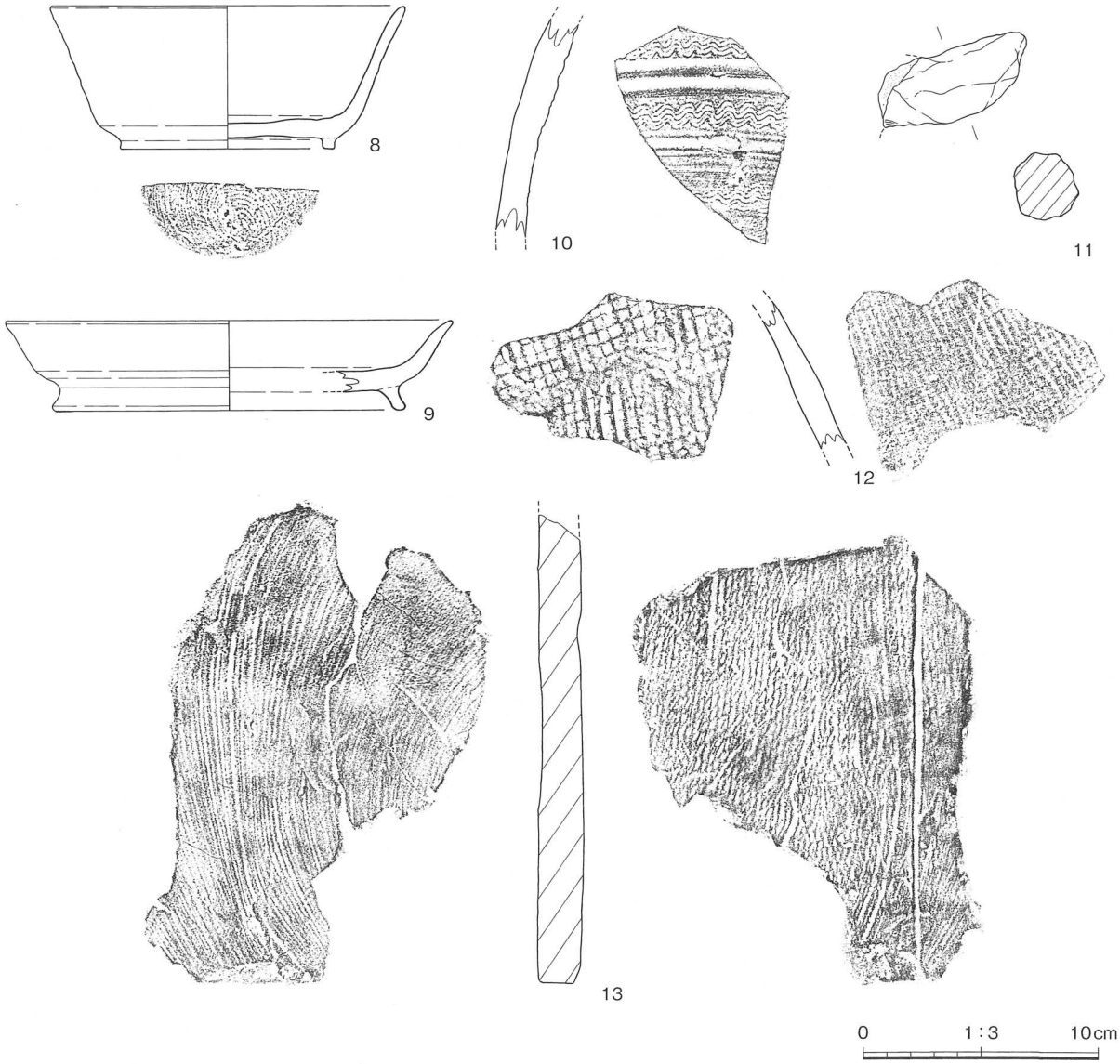
第11図　SI01　実測図（S=１：80）



第12図　SI01　出土遺物
（S=１：３）



第13図　SB01　実測図（S=１：80）



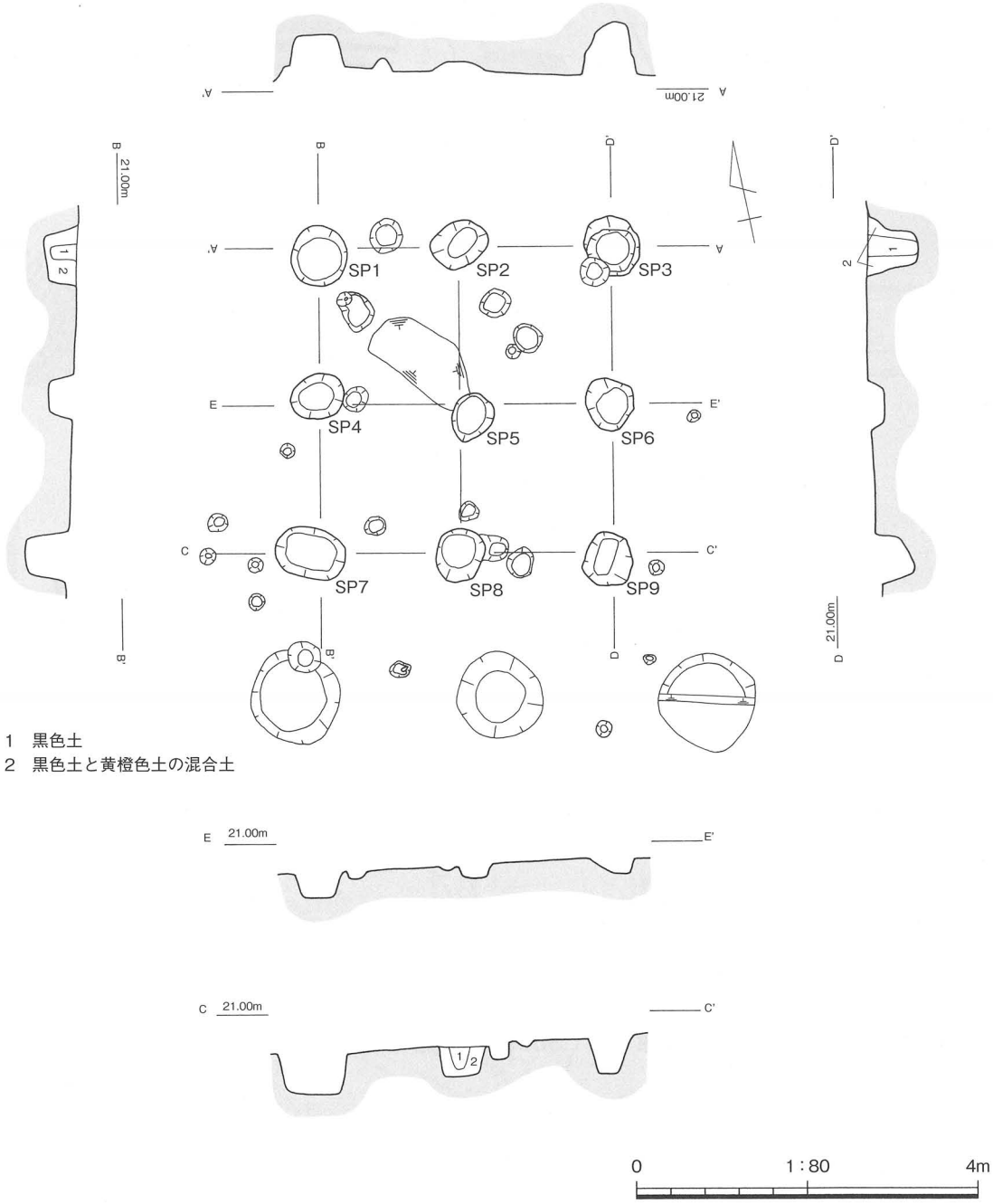
第14図　SB01　出土遺物（S=１：３）

時期

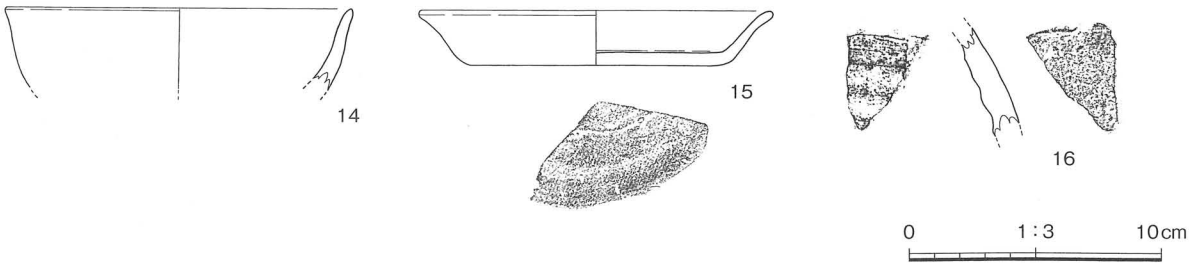
SB01は柱穴の掘り方から出土した中世の須恵器片（12）から中世前半以降と推測される。

③掘立柱建物SB02（第15図）

SB01の北側で検出した総柱構造の建物である。建物の規模は桁行２間（3.6m）、梁間２間（3.4m）を測り、主軸方位はN－14°－Eである。柱穴の形状は円形や楕円形を呈し、上縁径0.5～0.7m、深さ0.1～0.6m、底面標高19.9～20.5m、柱痕径は0.22～0.24mを測る。四隅の柱穴（SP１、３、７、９）はやや深く通し柱で、他の柱穴（SP２、４、５、６、８）は浅いため床束であったと考えられる。SB01と主軸方向が同じであること、また、SB01、02の西側柱筋が揃っていることから、同時期に存在していた可能性が高い[註2]。SB01北側柱とSB02南側柱の距離は約1.8mと狭く、隣り合うように建っていたものと推測される。柱穴内からは土師器、須恵器、瓷器系陶器が出土している。瓷器系陶器は柱穴の検出面から出土し、耕作土の攪乱により後から入り込んだものと思われる。



第15図　SB02　実測図（S=１：80）



第16図　SB02　出土遺物（S=１：３）

出土遺物（第16図）

第16図の14、15は柱穴埋土から、16は柱穴の検出面から出土している。14は土師器の坏で口径13.6cmを測る。体部は丸みをおび、口縁部はやや外反する。12世紀頃のものと思われる。15は須恵器の皿である。口径13.7cmを測り、口縁部は緩やかに外反する。８世紀中葉から９世紀中葉のものである。16は瓷器系陶器でにぶい赤褐色を呈し、黒色の斑点がわずかにみられ中世後半頃のものと思われる。

時期

出土遺物、SB01との関係から中世前半以降と思われる。

④掘立柱建物SB03（第17図）

調査区南側で検出した建物で、一部SB04と重複しており、建物の西側は調査区外へと続いている。両建物の検出面が耕作土直下の地山面であること、後述するSB04から遺物が出土していないことから、新旧関係は確認できなかった。検出した範囲での規模は、桁行３間（8.8m）、梁間１間（2.1m）で、主軸はN－12.5°－Eである。柱穴はほぼ円形を呈し、柱穴径0.6～0.7m、深さ0.2～0.5m、底面標高18.0～18.6mを測り、柱痕径は確認できたもので20cm程あった。柱穴内からは土師器、須恵器が出土している。

出土遺物（第18図）

第18図の17は土師器の甕の口縁である。18は須恵器の坏で、口径14.6cm、底径9.2cm、器高5.3cmを測る。高台は低く、体部が「ハ」の字状に開くもので、８世紀後半から10世紀後半頃のものである。他に図化は出来なかったが、胎土や焼成から中世と思われる坏片が出土している。

時期

出土遺物や建物の主軸方向がSB01・02とほぼ同じであることなどから、中世以降の可能性が高いと考えられる。

⑤掘立柱建物SB04（第17図）

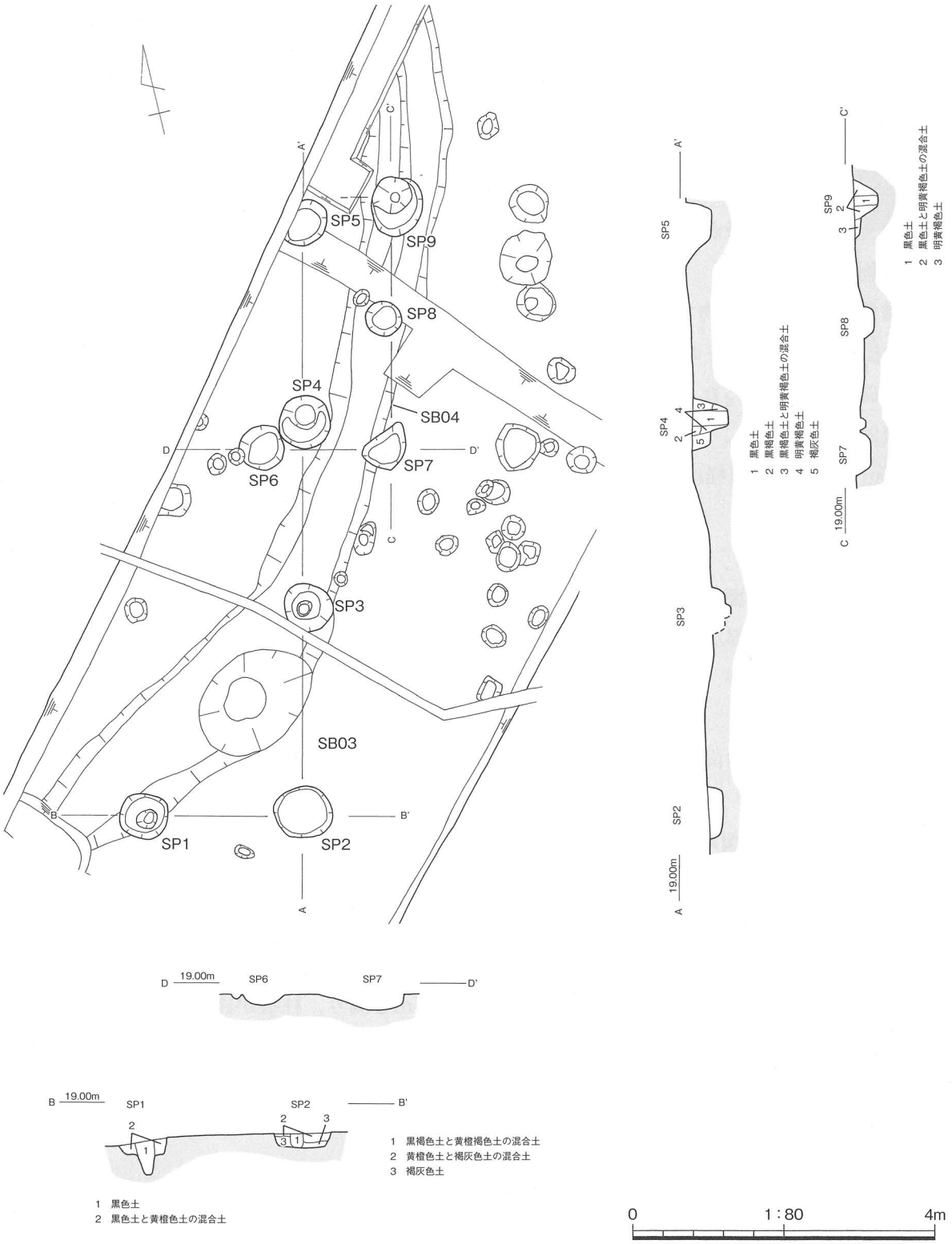
SB03と重複する建物で、西側調査区外へと続いている。検出した範囲での規模は桁行２間（3.4m）、梁間１間（1.7m）、主軸はN－13°－Eである。桁行柱穴間は1.7mを測り、SP９の1.7m先に柱穴を確認していないことから、この建物の桁行は２間と考えられる。柱穴は削平され不整形なものもあるが、上縁径0.5～0.8m、深さ0.1～0.3m、底面標高18.6～18.7mを測り、柱痕が確認できたものは直径が10cm程であった。柱穴内から遺物が出土していないため、時期は不明であるが、主軸方向が他の掘立柱建物とほぼ同じであることから、あまり時期差のない建物と推測される。

⑥溝SD01・02（第19図）

調査区北端で検出した溝である。

SD01は幅1.7m、深さ0.35mの東西方向にみられる溝である。南側は２段になっており、断面は浅いU字状を呈する。底幅は西側では狭く、東側で広がり、底面は西側から東側に向かって傾斜していた。埋土からは土師器、須恵器の破片が出土したが、時期を特定できるものはなかった。

SD02はSD01が埋まった後に掘られた長さ2.55m、0.35m、深さ５cm、南北方向の浅い溝である。底面は北から南に向かって傾斜していた。埋土中からは土師器、須恵器の他陶磁器の細片が出土し、近世以降の溝である。



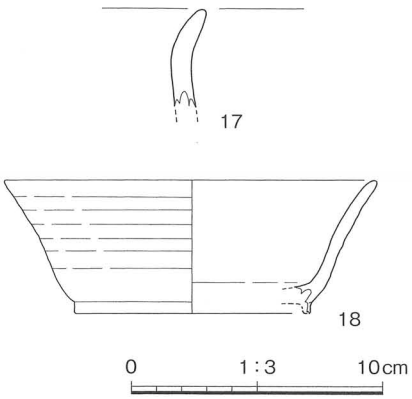
第17図　SB03・04　実測図（S=１：80）

⑦土坑SK01（第20図）

東西2.1m、南北1.95m、深さ0.15～0.25mの隅丸方形の土坑である。土層断面からSK01が埋まった後にSB01のSP３が掘られている。意図的に方形に掘られたものであるが、１、２区から同じような土坑は検出されておらず、性格不明の土坑である。土坑内からは８世紀中葉から９世紀初め頃の遺物が出土し、遺物からもSK01がSB01より古いと考えられる。

出土遺物（第21図）

第21図の19、20は皿である。19は口径14.4cmを測り、底部は内湾し、口縁部は短く外反するものである。20は口径19.4cmを測り、口縁端部内面がわずかに沈線状になっている。



第18図　SB03　出土遺物
（S=１：３）

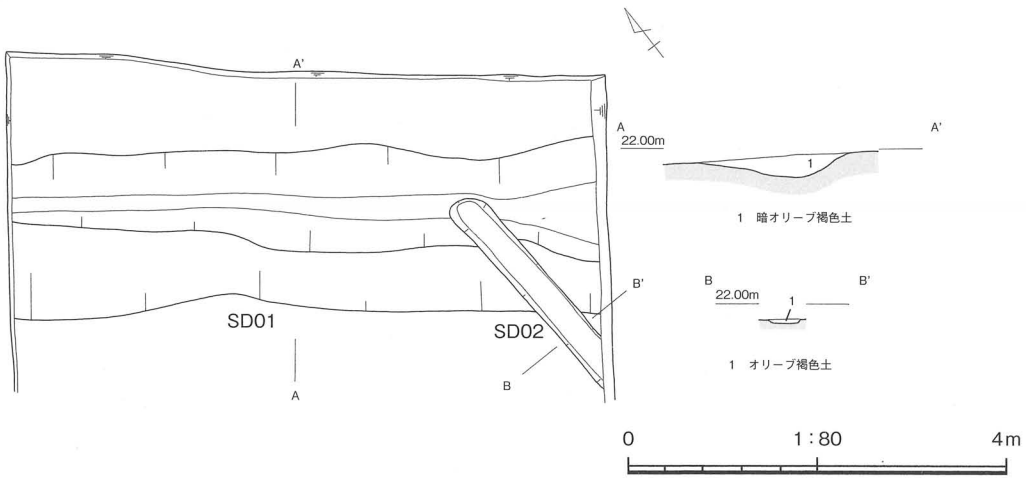
⑧土坑SK02（第20図）

SK01の南西側に位置する。SK03・04・05と切り合い関係にあり、土層断面や検出状況から古い順にSK05→SK02→SK03・04と考えられる。

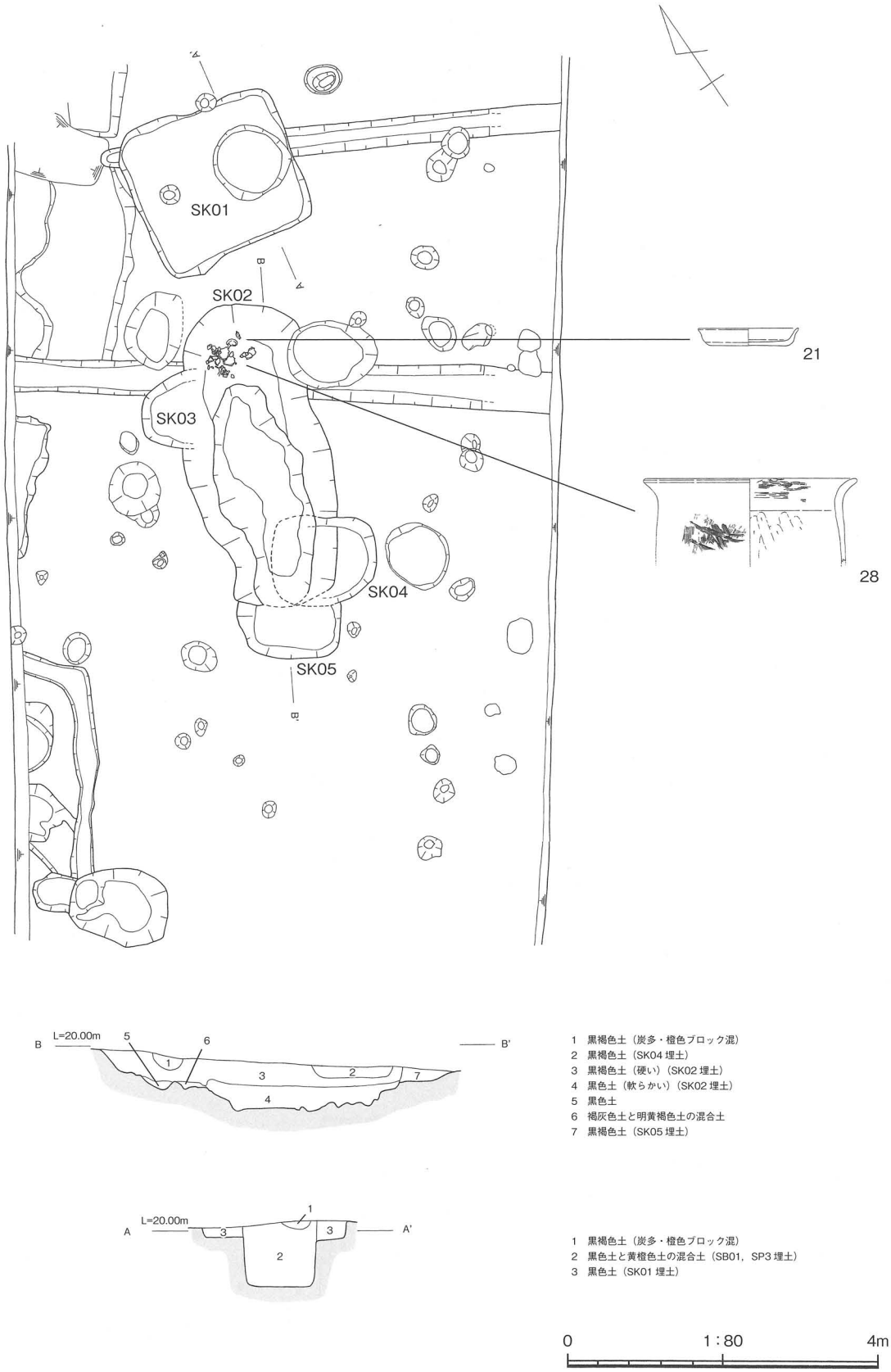
SK02の南西端は明確にできなかったが、土層断面から長径3.9m、短径1.9m、深さ0.58mを測り、主軸は南西方向である。形状は隅丸の長方形を呈し、内面は２～３段状に落ち、壁面は凸凹していた。埋土は上層が硬い黒褐色土（第20図第３層）、下層が軟らかい黒色土（第20図４層）で、本調査区のなかで最も多くの遺物が出土した遺構である。特に３層に遺物が多く、土坑北端の検出面からまとまって出土している。土師器の甕、須恵器の坏、製塩土器などが出土し、９世紀前半頃の土器もあることから、土坑が埋まった時期も同時期と考えられる。

出土遺物（第22図）

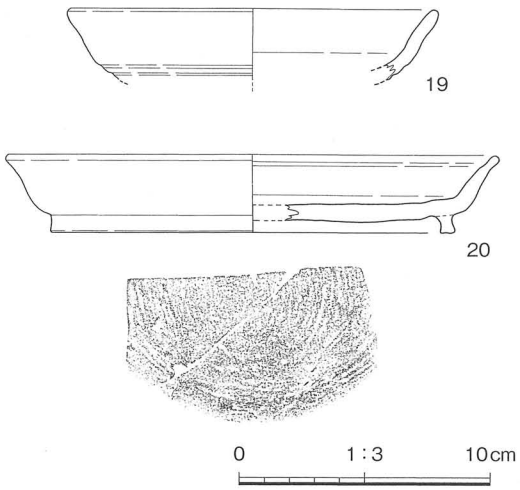
第22図の21～23は須恵器である。21は口径11.5cm、底径8.6cmを測る坏である。22は口縁端部がやや外反する口径13.5cm、底径10.4cmを測る皿である。23は高台をもつ坏で、高台は低く、体部はやや「ハ」の字に開き、底部外面は回転糸切り後ナデ調整を施す。口径15.4cm、底径10.2cm、器高6.4cm



第19図　SD01・02　実測図（S=１：80）



第20図　SK01～05　実測図（S=１：80）

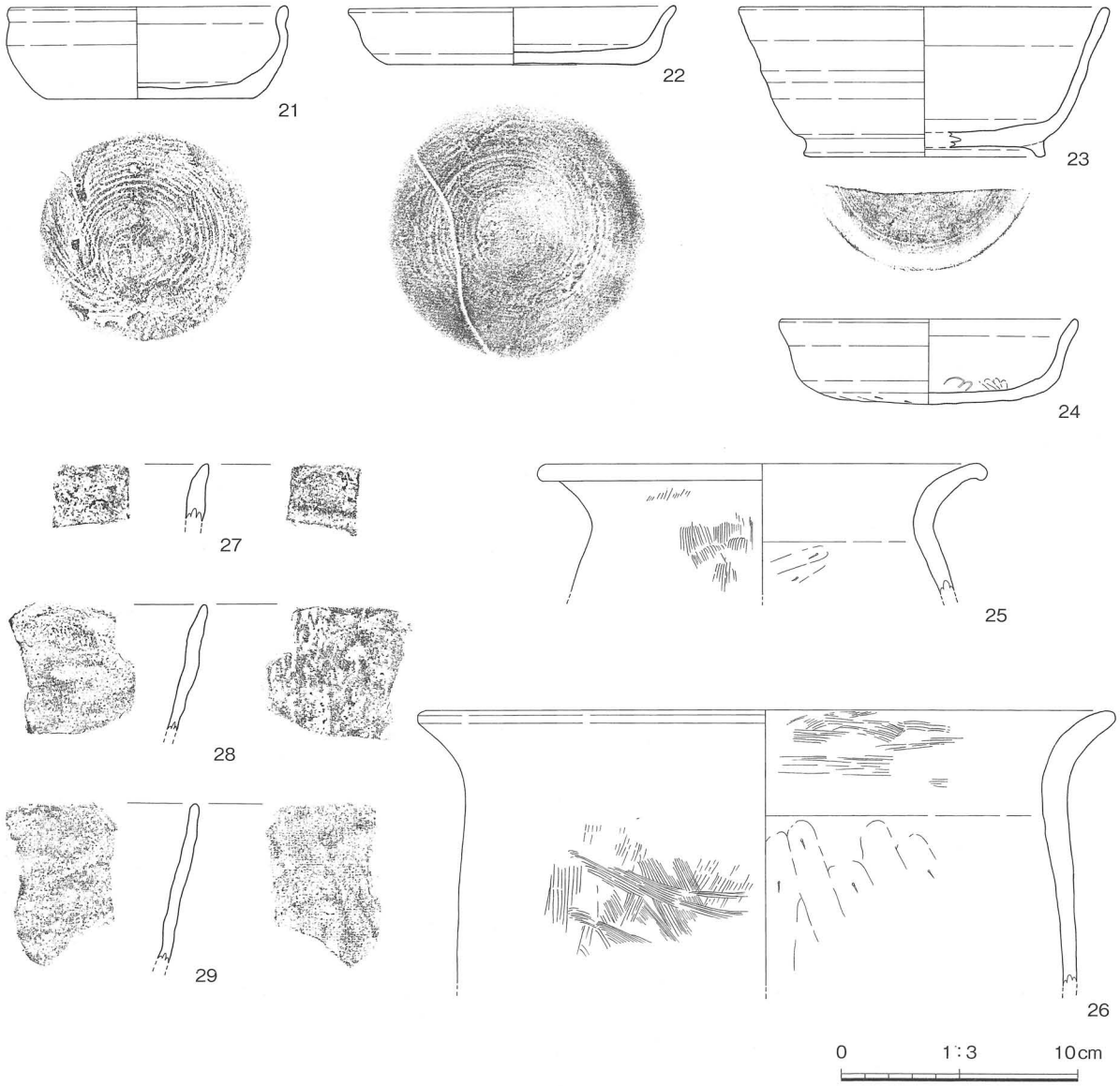


第21図　SK01　出土遺物（S=１：３）

を測る。24～26は土師器である。24は口径12.4cm、器高3.6cmを測る坏で、内外面に赤褐色の顔料が塗彩されている。内面の底面には円弧状の暗文がわずかにみられ、ヘラミガキが施されている。底部外面には手持ちヘラケズリを施す。25、26は土師器の甕である。27～28は製塩土器である。28、29の器壁は薄く、27はやや厚めである。手捏で、内外面とも風化しているが指頭圧痕がわずかにみられる。27の口縁端部外面は淡黒色に変色していた。

⑨土坑SK03（第20図）

SK02が埋まった後に掘られた土坑である。全容は

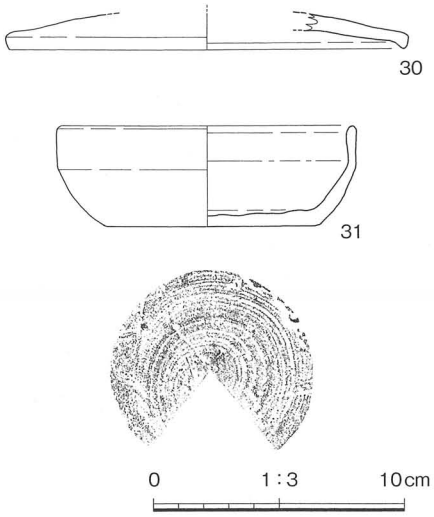


第22図　SK02　出土遺物（S=１：３）

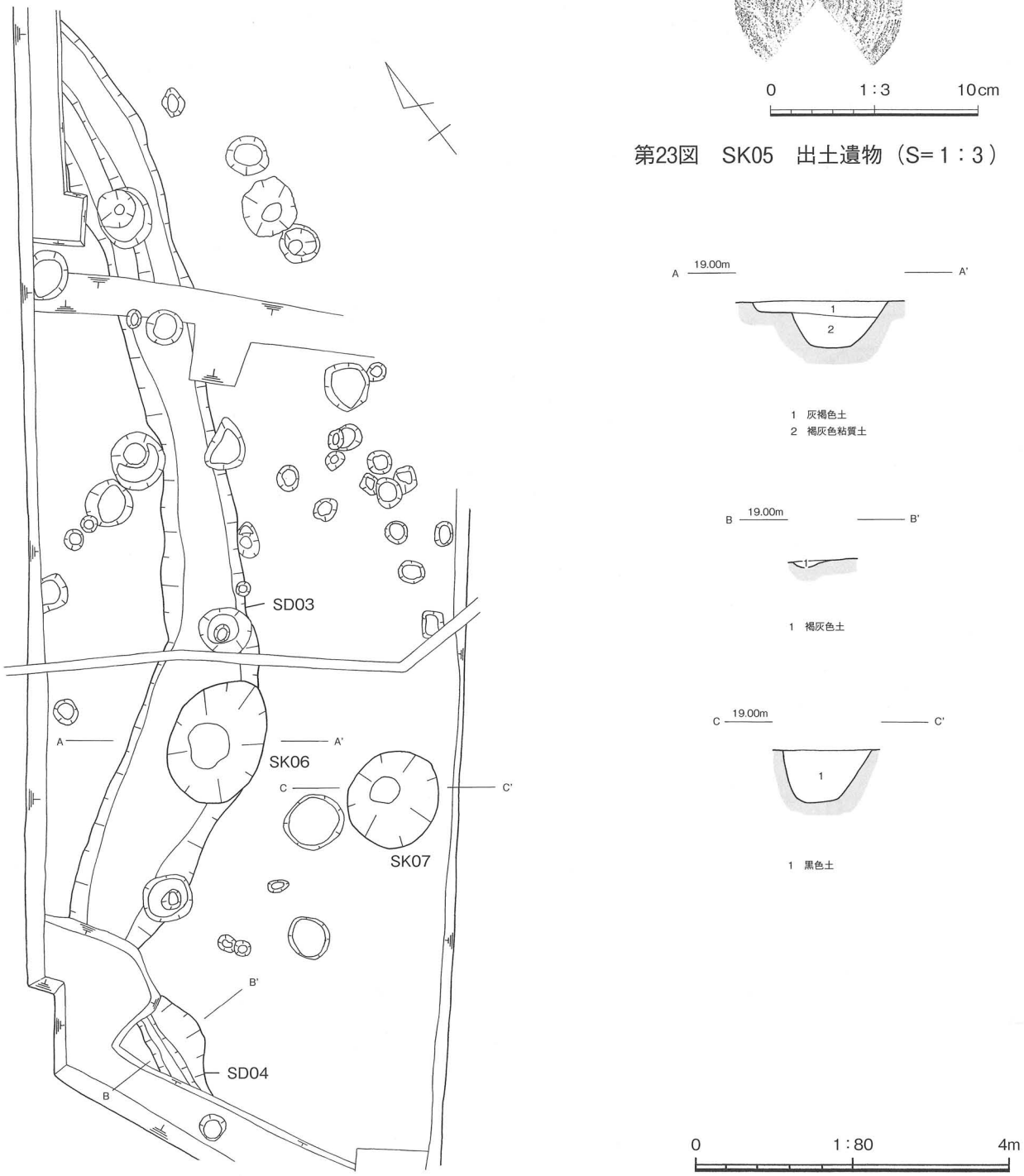
不明であるが、現状で東西0.5m、南北0.9m、深さ0.1mを測る。遺物は出土していない。

⑩土坑SK04（第20図）

土層断面からSK02が埋まった後に掘られた土坑である。現状で、南北1.12m、東西0.8m、深さ0.1mを測り、土坑の西側はSK02半裁時に掘削したため不明である。遺物は出土していないので性格や時期は不明であるが、埋土や形状



第23図　SK05　出土遺物（S=１：３）



第24図　SD03・04、SK06・07　実測図（S=１：80）

がSK03とよく似ていることから、同時期に掘られた可能性がある。

⑪土坑SK05（第20図）

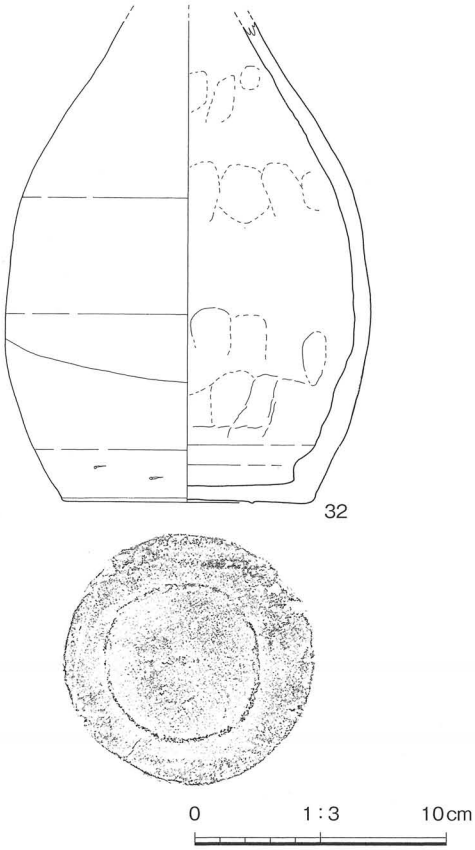
SK02の南側で検出した土坑で、土層断面の切合関係からSK02より古い。現状で東西1.25m、南北0.7m、深さ0.2mを測り、土坑内から須恵器が出土している。

出土遺物（第23図）

第23図の30は蓋で口径15.2cmを測る。口縁端部はわずかに屈曲し、９世紀前半頃のものと思われる。31は口径11.6cm、底径8.6cmを測る坏で８世紀から９世紀代のものである。

⑫溝SD03（第24図）

調査区南側で検出した南北に走る溝で、長さ12m、幅0.7～1.4m、深さ0.1～0.2mを測る。溝の底面からSK06を検出した。遺構内からは土師器、陶磁器類が出土し、緑釉の布志名焼の破片が出土していることから江戸時代後期以降の溝と思われる。



第25図　SK06　出土遺物（S=１：３）

⑬溝SD04（第24図）

調査区南端で検出した長さ1.3m、幅0.5～0.7m、深さ５cmの浅い溝である。SD03との切り合い関係からSD04が古いと考えられるが、遺物が出土していないため時期は不明である。

⑭土坑SK06（第24図）

SD03底面から検出した土坑である。南北1.3m、東西1.5m、深さ43cmを測る。遺構内からは陶器が出土し、近世以降の土坑である。

出土遺物　（第25図）

第25図の32は肥前の壺である。底径10.0cm、器高19.1cmで頸部から上を欠いている。外面にはにぶい黄褐色の釉がかかり、内面には指頭圧痕や叩き痕が残る。底部には重ね焼きした時の容器の痕跡がみられる。

⑮土坑SK07（第24図）

SK06の南東側で検出した土坑で、東西1.3m、南北1.15m、深さ68cmを測る。土坑内から遺物は出土していない。

第４章　まとめ

今回の調査は、宅地開発事業のなかの道路予定地部分だけの調査であり、調査範囲が限られていた。狭い範囲の割に多くの遺構が検出され、検出状況から溝は調査区外に続き、また、T－２で検出した柱穴のように調査区外で確認されたものもあり、遺構が調査区外に広がっている状況がみられた。

調査の結果、建物や土坑は茶臼山南麓の標高約18～22mの緩斜面下側で検出された。本遺跡北側で行った試掘トレンチ（T－５・６）の結果からは、緩やかな地山面が確認されているのみで、遺構、遺物を検出していない。トレンチ調査は部分的な調査であり、耕作による地山面の削平や堆積土の流失によって一概には言えないが、遺構が偏在していた可能性がある。

調査区から、掘立柱建物、竪穴建物、土坑、溝、多数の柱穴を検出した。耕作土直下が遺構検出面であることや遺物が出土していない遺構もあり、時期を特定できるものは少なかった。

以下、遺構、遺物から山代沖田遺跡の変遷について述べてみたい。

調査区内の古い遺構は、古墳時代の竪穴建物である。この竪穴建物は、一辺が2.4m程の小さなもので、遺物は土師器の甕片のみであるため、詳細な時期は不明である。他に調査区内から古墳時代の蓋坏、瑳の破片も出土している。全調査区で竪穴建物はこの１棟だけであるが、古墳時代に人々の生活の場があったと思われる。調査区から出土した遺物は細片が多く時期を明確にできるものは少なかった。遺物のなかに弥生土器と思われる破片は確認できなかったため、調査区において、古墳時代から人々の生活が始まった可能性が高いと思われる。

出土した遺物のなかで一番多かったのは、８世紀から10世紀頃の須恵器や土師器である。なかでも８世紀後半～９世紀前半頃の須恵器の坏や皿が多く出土している。この時期の建物は特定できていないが、素掘りの土抗SK01～05は出土遺物や検出状況からこの時期の遺構と考えられる。その土抗のなかでSK02は、検出状況からSB01より古い土坑で、他に丹塗りの坏や製塩土器が出土している。製塩土器は口唇部がやや尖ったものや丸くおさめたもので、これらの製塩土器は８世紀後半以降のものと思われる。本遺跡周辺で製塩土器が出土しているのは、出雲国府跡や山代郷正倉跡、上小紋遺跡、黒田畦遺跡など官衙遺跡に関連する遺跡であり、本調査区周辺にも８世紀後半から９世紀頃の官衙的な建物が存在していた可能性が窺われる。

他に、１点ではあるがT－２から出土した古代の熨斗瓦がある。この瓦は山代郷南新造院（四王寺）に瓦を供給していた小無田Ⅱ遺跡の瓦窯出土のものと似ており、また位置的にも近く、なんらかの関連性が窺われる。

次に、復元できた中世前半以降の建物（SB01～04）である。掘立柱建物４棟を確認し、そのうち１棟は総柱建物であった。掘立柱建物のなかで特に注目されるのはSB01である。南北３間、東西２間、主軸方位N－14°－E、柱穴の直径１m前後、深さ0.5～1.2m、柱間寸法2.8m、柱痕径0.23～0.27mを測る。円形の掘り方に、黄色土と黒色土をランダムではあるが交互に入れ、版築を意識しているように思われる。周辺の遺跡において、柱穴内埋土で版築状の土層が確認されているのは、下黒田遺跡や山代郷正倉跡である。これらの版築状土層はきれいな互層状をなし、掘り方は方形であり、山代沖田遺跡の時期とは異なる。しかし、SB01の柱の掘り方の規模や埋土の状況から判断すると、SB01の建て

方は古代の様相を残す中世前半以降の建物といってもいいのではなかろうか。SB01の柱は直径25cm前後を測り、柱穴底面には柱当たりの痕跡があった。後世の削平を受けているとはいえ、調査区内からは殆ど瓦の出土を見ておらず、瓦葺屋根の可能性は低いと考えられる。

SB02はSB01北側に隣接する総柱建物である。SB01と建物の主軸方位が同じであり、また、西側柱筋がそろっていることから同時期に建っていた可能性が高い。風土記の丘周辺において、８世紀後半には一般集落内でも総柱建物が出現することや一般集落では３間×２間の掘立柱建物が建築として普遍的な存在であることから[註3]、SB01は主屋、SB02は付属建物であったのではなかろうか[註4]。また、SB01の柱痕や掘方径の大きさ、床面積の広さから一般庶民とは考え難く、有力者の居館と思われる。

また、調査区南側では、重複するSB03、04を検出している。主軸方位がSB01・02とほぼ同じであることから、同時期に存在し、建替えられたものと思われる。

山代沖田遺跡が存在する緩斜面全体を調査してはいないが、１区からも中世前半の遺物が出土していることから考えると、中世前半以降に当地域に有力者が居館を構え、その周辺に人々の住居が存在していたことが推測される。本遺跡から南東方向、意宇平野南側丘陵に位置する天満谷（てんまだに）遺跡では、中世前半の掘立柱建物や溝、土師質土器や中世須恵器、輸入陶磁器、陶器が確認され、豪族の館跡と考えられている。しかし、SB01のような大きな柱穴をもつ建物はなく、また総柱建物を伴ったものはない。詳細な時期はわからないが、意宇平野南側丘陵と茶臼山から南西に派生する緩斜面にはそれぞれ有力者が存在していたのであろう。

中世後半の遺構は確認されていないが、15～16世紀の瓷器系陶器が出土しており、同時期の遺構の存在が窺われる。

近世以降の遺構としては溝や土坑が検出され、陶磁器の破片が出土している。遺構の性格は不明であるが、周辺に人々が存在していたことは確実であり、地勢や歴史的様相を示すような字名も残っているのは興味深い。

例えば、今回の調査に直接関係してはいないが、山代沖田遺跡の北側には、現在は存在していない「光泉寺」という寺の字名がみられる。周囲には、「鍛冶場」「市場」という字名も残っており、当地域は「光泉寺」を中心とした集落があったと考えられ、「沖田」もその集落に関連した水田であった可能性が考えられる。

さらに詳しく「光泉寺」について述べてみたい。「光泉寺」を語る上で、茶臼山の頂上から少し南東中腹に位置していた「高森神社」から語ることが必要となる。「高森神社」は山代村の氏神であった。「風土記抄」（1683年）には山代山（茶臼山）の小さな森を高森大明神の社と記したが、社殿の存在は不明である。延宝８（1680）年、当時山代村に属していた古志原の開拓が進み、氏神の勧請が必要となり、その関係から「高森神社」を現在の古志原「山代神社」の位置に勧請し、古志原「高森神社」と称した。その後、文化10（1813）年の『天文方御用手鏡』には古志原「高守山代大明神」と記され、明治４（1871）年の社格決定の際には現在の「山代神社」となった。山代の「高森神社」が古志原の「高森（守）神社」（後世「山代神社」と称する）となった。「鍛冶屋」、「市場」の字名は古志原にもあり、山代村のその字名の場所で生活していた人々の一部が古志原に移住し、そこでまた同じ字名を付けたことが推測されている[註5]。

享保２(1717）年に編纂された『雲陽誌』の古志原について記載されているところに、「此所近年民

家を作、夏より秋にいたるまで牛馬の市を催、土人群集す。」「高守神社」延宝年中勝部氏勧請す。「観音堂」とある。[註6] この「観音堂」は現在の古志原交番の南西丘の上にある「亀龍山　光泉寺」観音堂である。高守神社が勝部氏によって勧請されたと同様に、山代村にあった光泉寺も古志原の「観音堂」に勧請されたと推測される。[註7]

今回の調査では、「光泉寺」周辺の様相を解明するような遺構は確認されなかった。しかし、山代沖田において、古墳時代から現代まで脈々と人々の生活が続き、出土遺物の量から８世紀後半～９世紀前半頃にそのピークを迎えたと思われる。また、茶臼山南麓に中世前半以降の居館が建っていたことが確認されたことは、風土記の丘周辺の中世を解明する上で有意義であったと考えられる。今後、周辺の調査が進めば、山代周辺の歴史的な様相や字名に関係するような集落等が発見される可能性は高い。

註１　奥田元宋・小由女美術館館長　村上勇氏、大田市教育委員会　西尾克己氏の御教示による。
註２　島根大学法文学部　教授　大橋泰夫氏のご教示による。
註３　島根県古代文化センター「９．集落・農地などの復元」『出雲国府周辺の復元研究』 2009年。
註４　註２に同じ。
註５　風土記の丘　調査員　山本和寛氏の御教示による。
　　大庭公民館『わがとこ聞きある記　語りつぐ大庭の歴史』 平成23年。
註６　黒沢長尚『雲陽誌』 享保２（1717）年。
註７　註５に同じ。

表１　検出した建物の規模と出土遺物

遺構番号	主軸方位	Pit番号	法量 (m) 上縁径	深さ	底面標高	柱痕径	出土遺物
SB01 桁行３間 (8.4m) 梁間２間 (4.7m)	N－14°－E	SP１	0.9	0.5	19.3	0.26	須恵器：皿、甕　土師器片
		SP２	1.0	0.7	19.3	0.26	須恵器：坏、蓋　土師器片
		SP３	1.0	0.6	19.3	0.23	須恵器：坏　土師器：把手 中世須恵器
		SP４	1.1	1.2	19.1	0.26	須恵器：甕
		SP５	1.0	1.3	19.1	0.27	土師器：坏
		SP６	1.2	1.2	19.2	0.25	須恵器片　土師器片
		SP７ (T－２)	1.0	－	－	0.27	須恵器：坏　熨斗瓦
SB02 桁行２間 (3.6m) 梁間２間 (3.4m)	N－14°－E	SP１	0.7	0.4	20.1	0.22	須恵器：坏　土師器：甕
		SP２	0.5	0.1	20.5	－	
		SP３	0.7	0.6	20.0	0.24	
		SP４	0.5	0.3	20.2	－	須恵器：皿
		SP５	0.5	0.2	20.4	－	
		SP６	0.6	0.2	20.4	－	
		SP７	0.6	0.5	19.9	－	土師器：坏
		SP８	0.6	0.4	20.1	0.22	
		SP９	0.6	0.5	20.1	－	瓷器系陶器
SB03 桁行３間 (8.8m) 梁間１間 (2.1m)	N－12.5°－E	SP１	0.6	0.5	18.0	0.24	須恵器：坏　土師器：甕
		SP２	0.7	0.2	18.4	0.17	須恵器：坏、甕　土師器：坏
		SP３	0.6	0.3	18.3	0.18	須恵器：坏　土師器片
		SP４	0.7	0.5	18.4	0.19	須恵器：坏　土師器片
		SP５	0.6	0.4	18.6	－	須恵器：甕　土師器片
SB04 桁行２間 (3.4m) 梁間１間 (1.7m)	N－13°－E	SP６	0.6	0.1	18.7	－	
		SP７	0.5	0.2	18.6	－	
		SP８	0.5	0.1	18.6	－	
		SP９	0.8	0.3	18.6	0.13	

表２　遺物観察表

土器

挿図番号	出土位置	種類	器種	法量（cm）			調整・手法の特徴	胎土	色調	残存	備考
				口径	底径	器高(残高)					
1	１区 柱穴	土師器	高台付皿	8.7	5.1	2.9	(外) 横ナデ (内) 風化	石英・長石微粒を多く含む	(外) 淡白赤橙色 (内) 白橙色	ほぼ完形	
2	２区 柱穴	須恵器	蓋	13.3	－	2.8	(外) 回転ナデ (内) 回転ナデ	0.5mm以下の白色砂粒をやや含む	(外) 灰色 (内) 灰色	1/8以下	
3	２区 柱穴	須恵器	坏	11.4	8.6	4.2	(外) 回転ナデ 底部 回転糸切り痕 (内) 回転ナデ	0.5mm以下の白色砂粒をやや含む	(外) 黄灰色 (内) 黄灰色	1/5	
4	２区 柱穴	須恵器	甕	－	－	7.9	(外) 叩き痕 (内) 当て具痕	0.5mm以下の白色砂粒をわずかに含む	(外) 灰色 (内) 灰色		
5	２区 堆積土	土師器	甕	－	－	5.2	(外) 風化 (内) ヘラケズリ　ナデ	１mm以上の白色砂粒を多く含む	(外) にぶい黄橙色 (内) 橙色		
7	SI01	土師器	甕	－	－	2.0	(外) 風化 (内) ハケ目	１mm以下の白色・茶色砂粒を含む	(外) 橙色 (内) にぶい橙色		
8	SB01 (SP３)	須恵器	坏	14.8	9.0	6.2	(外) 回転ナデ 底部 回転糸切り痕 (内) 回転ナデ	１mm以下の白色砂粒をやや含む	(外) 灰色 (内) 灰色		
9	SB01 (SP１)	須恵器	皿	18.8	14.4	3.8	(外) 回転ナデ 底部 回転糸切り後ナデ (内) 回転ナデ 静止ナデ	0.5mm以下の白色砂粒を多く含む	(外) 黄灰色 (内) 黄灰色		
10	SB01 (SP１)	須恵器	甕	－	－	9.5	(外) 回転ナデ (内) 回転ナデ 静止ナデ	0.5mm以下の白色・黒色砂粒を含む	(外) 灰色 (内) 灰色		外面に凹線と波状文
11	SB01 (SP３)	土師器	把手	－	－	7.2	(外) 風化 一部ハケ目が残る	0.5mm以下の白色砂粒を含む	(外) 橙色 (内) 橙色		
12	SB01 (SP３)	中世須恵器	壺・甕類？	－	－	7.0	(外) 格子目叩き (内) 格子目叩き	0.5mm以下の白色砂粒長石を含む	(外) 黄灰～灰黄色 (内) 黄灰色 (他) 断面：灰白色		
14	SB02 (SP７)	土師器	坏	13.6	－	3.2	(外) 風化 (内) 風化	0.5mm以下の白色砂粒をわずかに含む	(外) にぶい黄橙色 (内) 浅黄橙色		
15	SB02 (SP４)	須恵器	皿	13.7	9.8	2.2	(外) 回転ナデ 底部 回転糸切り後ナデ (内) 回転ナデ	0.5mm以下の白色砂粒をやや含む	(外) 黄灰色 (内) 黄灰色		
16	SB02 (SP９)	瓷器系陶器	－	－	－	4.3	(外) 回転ナデ (内) 回転ナデ	0.5mm以下の白色砂粒を多く含む	(外) 黒褐色 (内) にぶい赤褐色		内側に焼成により黒くなった砂粒がみられる
17	SB03 (SP１)	土師器	甕	－	－	4.0	(外) 風化 (内) 風化	0.5mm以下の白色砂粒を含む	(外) 黄橙色 (内) 黄橙色		
18	SB03 (SP３)	須恵器	坏	14.6	9.2	5.3	(外) 回転ナデ (内) 回転ナデ	0.5mm以下の白色砂粒をやや含む	(外) 灰色 (内) 灰色	1/5	
19	SK01	須恵器	皿	14.4	－	2.7	(外) 回転ナデ (内) 回転ナデ	0.5mm以下の白色砂粒を含む	(外) 灰色 (内) 灰色	1/8以下	
20	SK01	須恵器	皿	19.4	16.0	3.1	(外) 回転ナデ 底部 回転糸切り後ナデ (内) 回転ナデ 静止ナデ	１～２mm以上の白色砂粒を含む	(外) 灰色 (内) 灰色	1/3	
21	SK02	須恵器	坏	11.5	8.6	4.9	(外) 回転ナデ 底部 回転糸切り痕 (内) 回転ナデ 静止ナデ	１mm以下の白色砂粒をやや含む	(外) 黄灰色 (内) 灰黄色	4/5	
22	SK02	須恵器	皿	13.5	10.4	2.5	(外) 静止ナデ 回転ナデ 底部 回転糸切り痕 (内) 静止ナデ 回転ナデ	0.5mm以下の白色砂粒を含む	(外) 灰色 (内) 灰色		
23	SK02	須恵器	坏	15.4	10.2	6.4	(外) 回転ナデ 底部 回転糸切り後ナデ (内) 回転ナデ 静止ナデ	0.5mm以下の白色砂粒をやや含む	(外) 灰色 (内) 灰色		
24	SK02	土師器	坏	12.4	9.4	3.6	(外) ナデ 底部 ヘラケズリ (内) ナデ 底部 ヘラミガキ　ナデ	１mm以下の白色砂粒を含む	(外) 赤褐色 (内) 赤褐色	4/5	内面にわずかに暗文、解読不明の線刻有
25	SK02	土師器	甕	18.0	－	5.6	(外) ナデ　ハケ目 (内) ナデ　ヘラケズリ	0.5mm以下の白色砂粒を含む	(外) 浅黄橙色 (内) にぶい黄橙色	1/8以下	
26	SK02	土師器	甕	29.4	－	11.7	(外) ハケ目　ナデ (内) ハケ目ヘラケズリ	１mm以下の白色砂粒を多く含む	(外) 浅黄橙色 (内) 浅黄橙色		外面一部黒変
27	SK02	製塩土器	－	－	－	2.3	(外) 指頭圧痕 (内) ナデ	0.5mm以下の白色砂粒をわずかに含む	(外) 橙色 (内) 橙色		外面一部黒変
28	SK02	製塩土器	－	－	－	5.5	(外) 指頭圧痕 (内) 指頭圧痕	0.5mm以下の白色砂粒をやや含む	(外) 黄橙色 (内) 黄橙色		
29	SK02	製塩土器	－	－	－	6.8	(外) 指頭圧痕 (内) 指頭圧痕	白色微細粒をやや含む	(外) 黄橙色 (内) 黄橙色		
30	SK05	須恵器	蓋	15.2	－	1.9	(外) 回転ナデ (内) 回転ナデ	0.5mm以下の白色砂粒を含む	(外) 灰色 (内) 灰色 (端部) 灰黄色	1/5以下	
31	SK05	須恵器	坏	11.6	8.6	3.9	(外) 回転ナデ 底部 回転糸切り痕 (内) 静止ナデ 回転ナデ	0.5mm以下の白色砂粒を含む	(外) 灰色 (内) 灰色	4/5	
32	SK06	陶器	瓶	－	10.0	19.1	(外) ヘラケズリ　ナデ (内) 指頭圧痕　ナデ 叩き痕	0.1mm以下の白色細粒を含む	(外) 赤褐色 (内) 赤褐色	2/3	施釉

瓦

挿図番号	出土位置	器種	法量（cm）			調整・手法の特徴	胎土	色調	備考
			残存長	最大幅	器厚				
6	２区 L字状溝 (SD01)	平瓦	11.6	11.3	1.5	(外) 風化 (内) 風化	１mm以下の白色砂粒を多く含む	(外) 淡黄色 (内) 灰色	外面一部黒変
13	SB01 (T－２)	熨斗瓦	21.0	14.3	2.0	(外) 縄目叩き 糸切り痕 (内) 糸切り痕	0.5mm以下の白色砂粒を含む	(外) 黄灰色 (内) 黄灰色	深さ２mm、幅３mmの分割線有

写　真　図　版

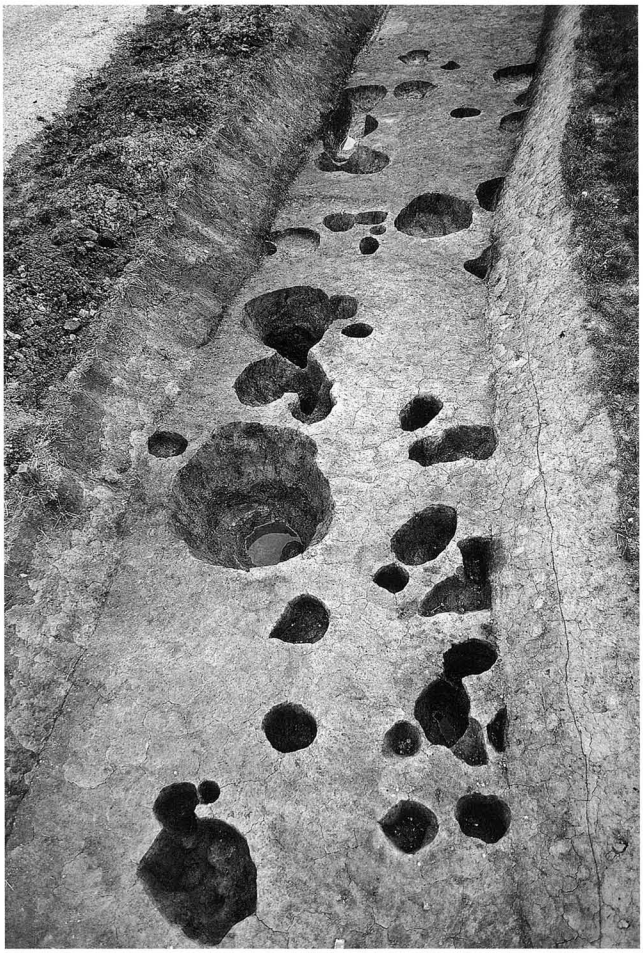
１区・２区　調査前近景
（南西から）

１区　完掘状況
（西から）

１区　完掘状況
（南から）

図版 2

2 区　完掘状況
（南西から）



2 区　完掘状況（一部）
（北西から）

2 区　L字状溝（SD01）完掘状況
（南西から）

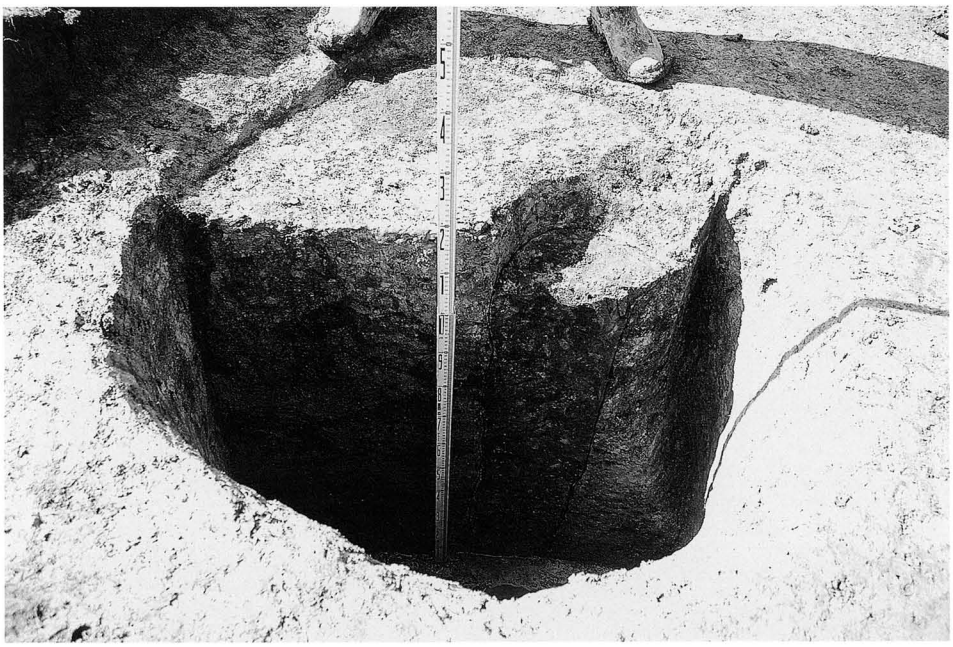
3区　調査前近景
（南西から）

完掘状況
（南西から）

SI01　完掘状況
（南から）

図版 4

SB01　完掘状況
（西から）



SB01 SP 6　半截状況
（北から）

SB02　完掘状況
（西から）

SB01・02　完掘状況
（北から）

SB03・04、SK06・07、
SD03　完掘状況
（南から）

SD01・02　完掘状況
（南東から）

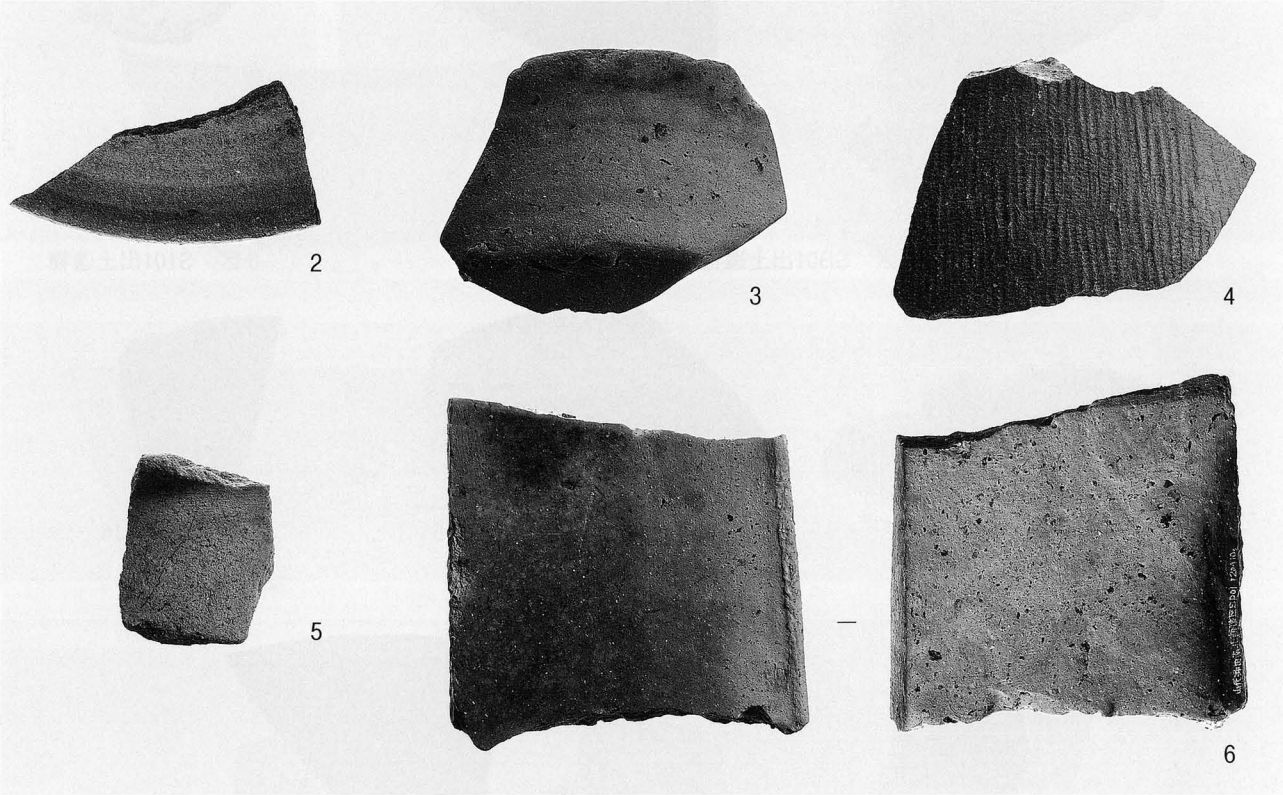
図版 6

SK02・03・04・05
完掘状況（南から）

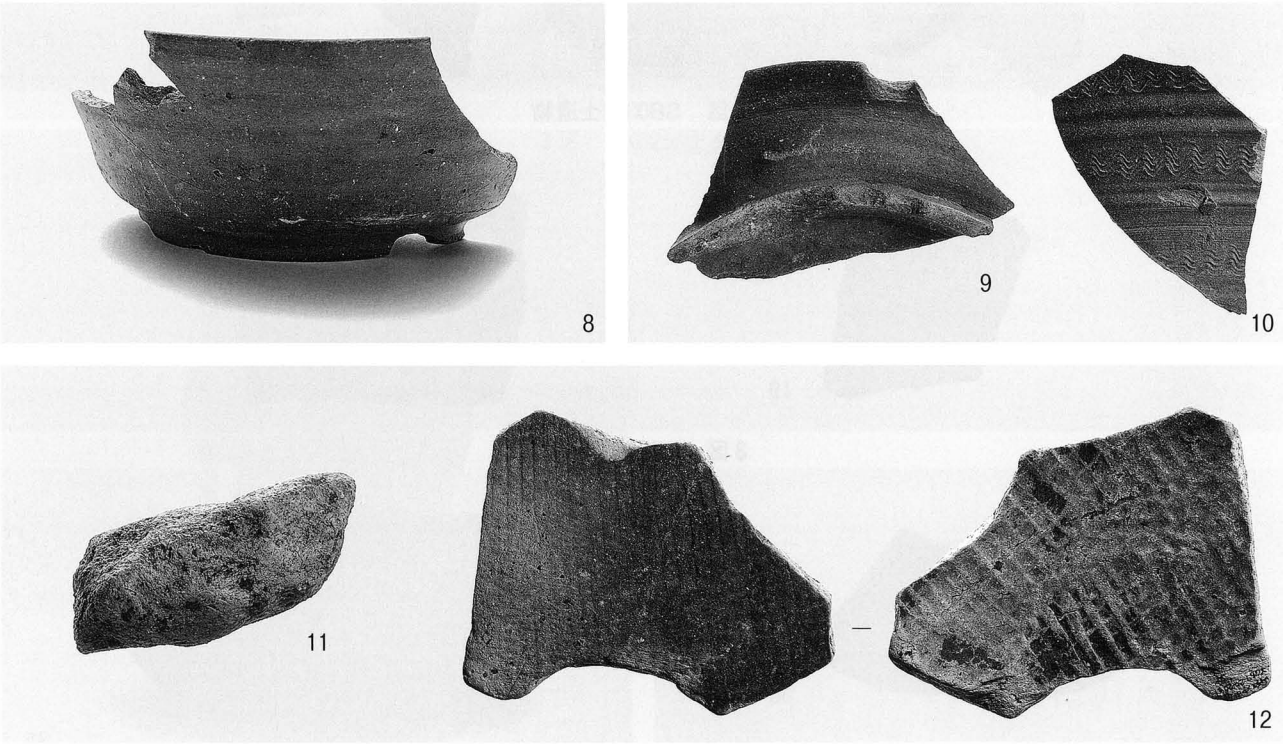
3 区　SK02
遺物出土状況

3 区　SK02
遺物出土状況

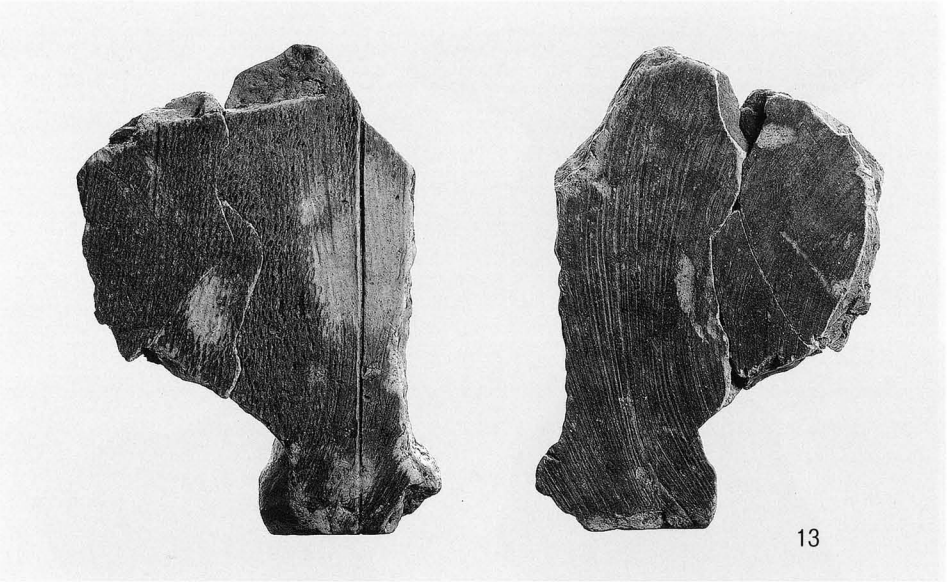
1 区　出土遺物



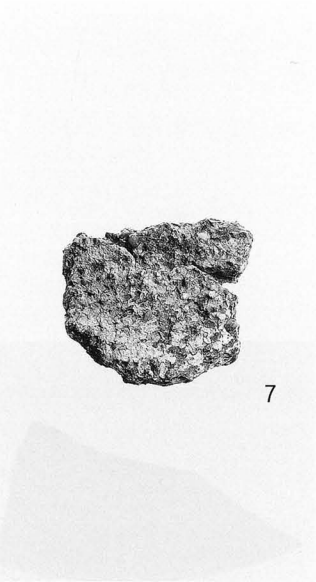
2 区　出土遺物



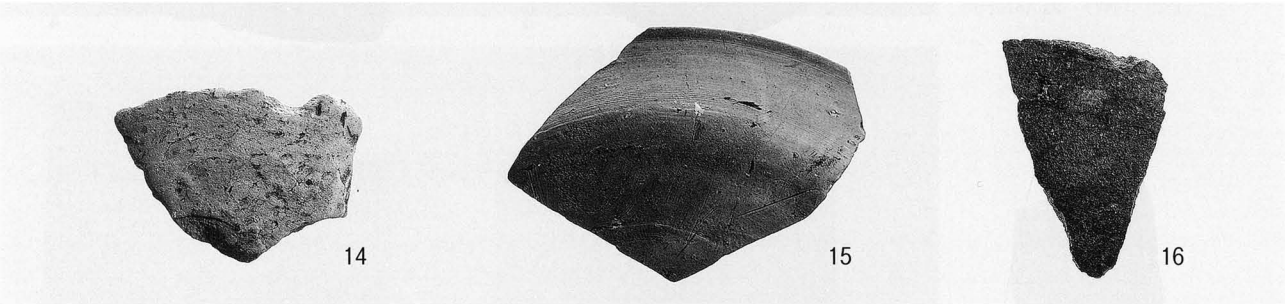
3 区　SB01出土遺物



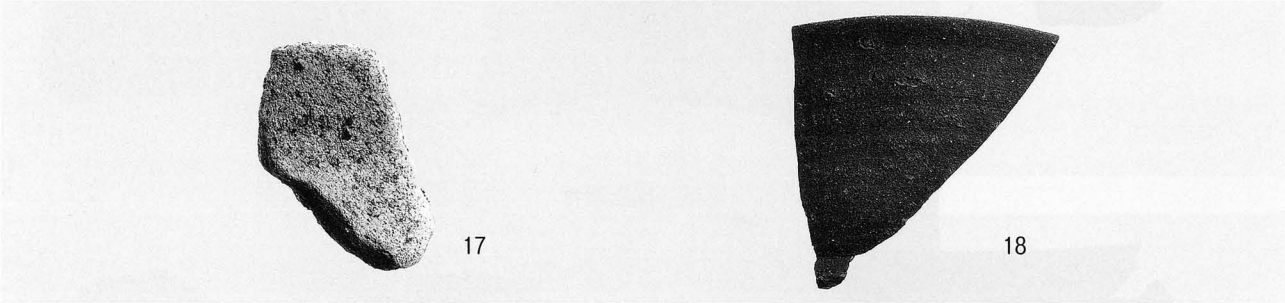
3 区　SB01出土遺物



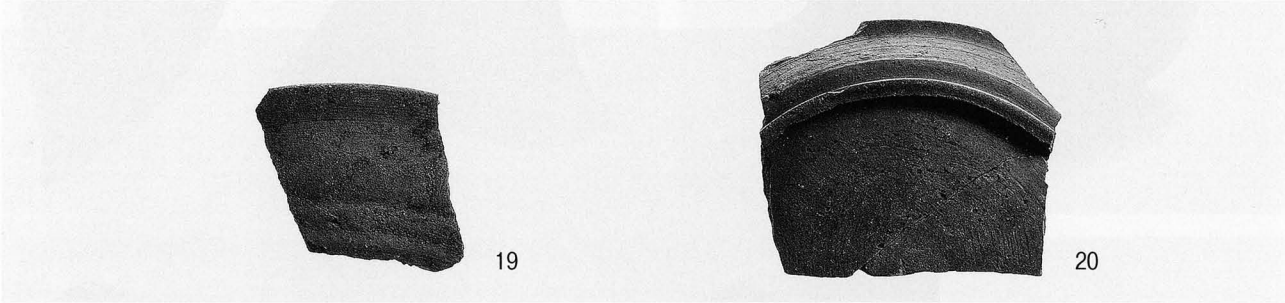
3 区　SI01出土遺物



3 区　SB02出土遺物



3 区　SB03出土遺物



3 区　SK01出土遺物

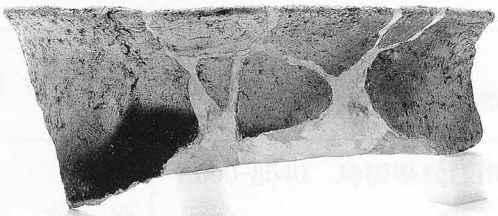
3 区　SK03出土遺物

21

22

23

24


26

25

27

28

29

3区　SK02出土遺物

32

3区　SK04出土遺物

報告書抄録

ふりがな	やましろおきたいせき
書名	山代沖田遺跡
副書名	茶臼山団地開発に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	松江市文化財調査報告書
シリーズ番号	第151集
編著者名	廣濱　貴子
編集機関	松江市教育委員会 財団法人松江市教育文化振興事業団
所在地	〒690-8540　島根県松江市末次町86番地（文化財課）　TEL：0852-55-5284 〒690-0401　島根県松江市島根町加賀1263-1（埋蔵文化財課）　TEL：0852-85-9210
発行年月	2012年11月

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	東経			
山代沖田遺跡（やましろおきたいせき）	島根県（しまねけん）松江市（まつえし）山代町（やましろちょう）364番（ばん）外4筆（ほか4ひつ）	32201	D1112	35°26′02″ 133°05′24″	20120406～20120420 20120806～20120914	712.8㎡	茶臼山団地開発

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山代沖田遺跡（やましろおきたいせき）	集落跡	古墳時代から近世	掘立柱建物 竪穴建物 土坑 溝 柱穴	土師器 須恵器 中世土器 陶磁器	茶臼山の南西麓の緩斜面から、掘立柱建物、竪穴建物、多数の柱穴、土坑、溝を検出した。柱穴の直径が1m程ある掘立柱建物（SB01）や総柱の建物（SB02）が確認され、これらは出土遺物から中世前半以降の建物と考えられた。

山 代 沖 田 遺 跡

平成24年（2012年）11月

発行　松江市教育委員会
　　財団法人松江市教育文化振興事業団

印刷　㈲ 高 浜 印 刷